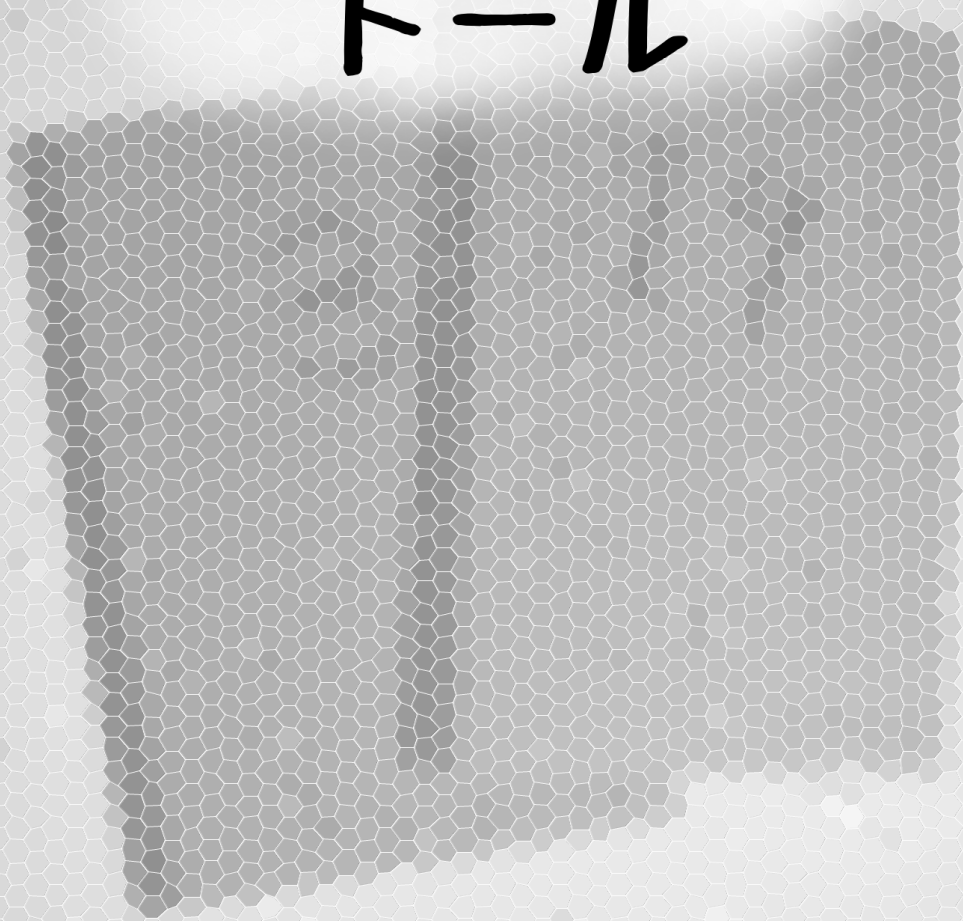


ストロベリー ドール



ストロベリィドール

片桐 天音

ストロベリードール

ストロベリードール 1
ストロベリードール 2
ストロベリードール 3
ストロベリードール 4
ストロベリードール 5
ストロベリードール 6

ストロベリィドール1

夏の日差しは私には眩しすぎる。無理やり気持ちを高揚させるこの陽光は、大事にしなきゃいけないものを全部隠してしまうから。

*

電車に一時間ほど揺られ、私の目的地を告げるアナウンスを聞く。駅のホームに降り立つと、既に待ち合わせの時間からは幾分過ぎていた。

休日の昼下がりとは言え、この小さな駅を目的地としている人は少なく、左右を見渡しても降りる人は私の他に二人か三人ほどしかない。ホームの掲示板の隅に貼られたくたびれた張り紙は何年か前に打たれた観光協会のポスターらしいけど、褪せてしまっすっかり字が読めなくなっていた。

ふるふるふるふる。

がたりと大きな音を立てて閉まる列車のドアが、どうとう戻れないところまで来たことを意識させる。電車は私をここに残して、人々を次の街へと運んでいく。

「文香はこの空、毎日見てるのかな」

突然の風に巻き上がるスカートを押さえながら空を見上げると、波打ったスレートの屋根の向こうに遙かな青が見渡せる。

「文香。本当に私は、あなたと再会してもいいのですよ
うか」

約束を交わした幼馴染が待つ広場へ、一歩ずつ彼女へと近づいていくことを意識する。

春が過ぎ、夏が来て、私が何もしなくても時間は過ぎていく。きっとそのうち、もう彼女にも会えなくなるだろう。

彼女は私を忘れ、私は彼女を忘れていく。私は彼女に酷いことをしたから、もう顔を合わせたいと思っちゃいけない。それで良かったはずなのに。

文香に会いたい。そう思った時には、入道雲が私に電話をさせていた。

電話で聞く彼女の声からは、私への嫌悪は感じられなかった。少なくとも、こうして逢瀬の約束を交わしても誰にも——自分以外には——怒られまいと、そう思うほ

どには。

*

駅前小さな広場に、私よりもちょっと背の高い黒髪がさらりと揺れる。黒いストレートの長髪は、大学二年生にしては厚ぼったくもあるけれど、その後ろ姿は高校の頃から変わらない彼女だということを示していた。

白いロングのワンピースが夏の空に良く似合う。ここに麦わら帽でも被せると、野原を無邪気に駆けまわっているイメージが湧くけど、今の立ち姿はどちらかと言えば木陰で静かに本を読んでいる方がしっくりくる。広い広い草原のど真ん中に一本だけ生えた大きな樹に寄りかかりながら、きつと人気のない古書店で見つけたような古いファンタジイの小説を読んでいるのだ。

明るい布地と暗い髪色に、駅前広場の植栽と深い青空。それらのコントラストがこの女性を景色から切り取るようにしてより一層魅力的にしていた。

「あら、紫織」

靴音に気付いた彼女が振り向いて目を合わせた。すら

りとした手脚を目で追う私の前で、私よりも幾分か大きなバストが揺れる。

「ごめん、待った？」

「ええ。三十分ほど。こんなにゆっくり街並みを眺めたのも久しぶりだわ」

私がおそらく二十分ほど遅れてしまったことを考えると、彼女——文香は待ち合わせの十分前にはこの広場に立っていたことになる。文香はめったに遅刻することのない真面目な性格だから、私の遅刻も心から許しているわけではない、と思う。

「本当に、ごめんなさい」

「いいのよ。この頃、少し忙しなかったからちようど良かったわ」

じつと立っているのは暑かったけれど、と黄色いチェックのハンカチで軽く額を拭う。

「紫織は、今日も寝坊？」

「えっと、うん……まあ、そんなところかな、えへへ」

「いつものあなたらしいわね」

高校の頃を思い出すわ、と言ってから彼女はくすりと

笑った。

私は朝が弱くてよく遅刻する癖がある。彼女はそこを言ってるはずだけど、まさか流石に一年ぶりの待ち合わせで遅刻するほどの悪癖のつもりじゃない。

でもわざわざそれを否定してまで、実は緊張していて家を出ようとしたあたりで体調が悪くなっていた、とも言えなかった。

「それで、今日はどうしたの？」

「どうした、っていうか……久しぶりに会いたくなっただけ？」

夏の陽気に後押しされて、あなたに会いたくなりました。はつきりそう言えればいいんだけど、そんなのはきつとただの気障な台詞か下手な言い訳にしか聞こえない。

「そうなの。予想が外れちゃったわね」

「予想？」

「あなた、悩んでる時はいつも『ゆっくりお話したい』って言っていたから」

だから、てっきり今日も悩み相談だと思っていたのと、また小さく笑った。

私は凶星を突かれたような気がして、思わず口に手を当てる。もちろん、一週間前に受話器に向かっていたこの口を塞げはしないけど。

「とりあえず喫茶店で落ち着きましょうか。ここはおしゃべりには暑すぎるわ」

歩き出してひらりと舞い上がる白いワンピースが、一緒に付いて回る艶めいた髪と共に夏の熱気を巻き上げる。ふわり、と柑橘の匂いがした。

「お店は任せるよ。ここらへんには詳しいんだよね、ふみ……」

それに着いていこうとする私の動きが止まって、言葉が止まって、そのせいで服が張り付くようなじとっ、とした嫌な汗が急に気になってくる。

「……紫織？」

「ええと、その」

一年以上連絡も取っていない友人に、私の手は届いているのか。彼女は私に手を伸ばしてくれているのか。分らなくなっただ距離感に一瞬言葉が詰まる。名前で呼んだり、遅刻したり、こんな馴れ馴れしくあっていいもの

なのか。

「……佐々木、さん」

彼女が求めていることと、私がしたいことと、私がしなきゃいけないこと。ぐるぐるとしたせめぎ合いの中で、私の視線は行く先を失う。どれも選んでも、しっかりと見つめることなんてできない。

こういう時に綺麗な空が広がっていると便利だと思う。

「あら。もう、文香って呼んでくれないのね」

「だって、私、佐々木さんに……」

彼女は私に背を向けたままだ。ワンピースの半紙にするりと黒髪の筆が下りて、そのまま墨の波紋を広げていく。描かれた黒い波紋が世界を覆っていくことを思いながら空に視線を遣ると、私の目には黒か灰色か分からない曖昧な空の色が映った。

「何を気にしているかは分からないけど、あなたの好きなように呼ぶと良いわ」

それから彼女は振り返って、私は、と言葉を区切る。小さく前に出るのと一緒にヒールがタンツ、と茶色いレンガの舗装を鳴らした。

「私は、あなたに名前で呼ばれるの、好きだったけど」

鋭く私に向かう視線に応えていると、街の雑多な音が全部かき消えて風と蝉の声だけになる。そういう空気が前から後ろから私を通り抜けて、辺りいっぱい満ちていくことに妙な高揚や興奮を感じてしまつて、思わず彼女を見つめてしまうのを止められない。

「あなたはどうか？ 紫織」

「私も名前で呼ばれるの、好きだよ。ふ……文香ちゃん」

「なら、良かったわ。お揃いね」

嬉しいわ紫織、と再び私の名を呼ぶ声が、じわーっと、心に温かいものを注いでいく。

「文香、ちゃん」

「どうしたの？ あなたも何だか嬉しそうね」

普段から頭の中では繰り返している彼女の名前なのに、そう口に出して呼んだだけで何だか頬が熱くなる。なりふり構わず大声で、全部夏の暑さのせいなのだと言いつてもなく誤魔化してしまいたい。

「ね、紫織。また、アヤと呼んでもいいのよ」

「……えっ？」

「変なわだかまりがあるのは嫌なの。なんなら私もまたシオちゃんって——」

呼びましょうか、と言ったあたりで私は思わず言葉を遮ってしまふ。

「や、やめてよ！」

まばらな通行人のいくらかがこちらを一瞥して、またそれぞれの歩みに戻っていった。喜びに満ちた高揚にちくりとした後ろめたさが差し、それらが全部まとめて萎んでいく。

昔の呼び名ほど、あの頃の二人を思い出させる名前ほど、聞きたくないものもない。聞きたくないだなんて、そんなこと私が言っちゃいけないのかもしれないけど。

「そう、残念ね」

じゃあ今度こそ行きましようか、と歩き出す文香。さりと流したのは全く気にしていないのか、それとも私を氣遣ってくれているのか。どちらにせよ、今の私にはわざわざ呼び止めてその真意を訊くような厚かましさも勇気もない。こうして二人で歩いているだけで、幸せなんだから。

不意に自分から出た大きな声のせいで、ばつ悪く文香の後ろを付いて歩く私の中では、シオちゃん、という声が何度も繰り返されていた。

*

老舗の喫茶店みたいなものを想像していたけど、喫茶店と言われて連れて行かれたのは私も良く見知ったチェーンのお店だ。店員に二言三言注文を告げてから、文香と丸テーブルを挟んで向い合う。

「そういう『街の喫茶店』は煙草臭いのよ。煙草を吸う常連さんに甘いところも多いし」

煙草の匂いは好きじゃない。上着も鼻もすっかり煙草で塗り替えられていくのを止められないあの無力感が、ずっと鼻に残ってしまうから。

「そういう喫茶店、何度か出入りしていたんだけど、すぐにやめてしまったの」

文香が煙草の世界と親しくなっていたかもしれないという想像をかき消され、私は少しだけ安心した。文香には物憂げに煙草を吸う姿もきっと画になってしまふから、

その想像は少しだけリアルに浮かんでくる。

分煙がちゃんとしてるチェーン店の方が居心地は良いわ、と言って彼女は金色のスプーンでコーヒーを軽く撫でる。立ち上る湯気が渦を巻いて私にも香りを届けていく。「どうしたの？ 私ブラックのコーヒーを飲めないの、知らなかった？」

文香が、シロップを注がれたカップを見つめる私に不思議そうに声を掛ける。私は慌てて自分のカフェラテを啜ってみせた。

「ううん、それは知ってるけど……コーヒー、いい匂いだなって思ってた」

「心が落ち着くいい香りよね。永遠に冷めなければ、飲まずにずっと楽しめるんだけど」

コーヒーを飲んでいる文香の様子が目に入って、それだけで不思議なことに香ばしくて心地良い匂いが更に強くなったように感じる。

「はしたないかもしれないけれど、良かったら飲んでみる？」

「え、えっ？」

「随分と熱い視線を送ってきてるみたいだから、飲みたいのかと思って。いらない？」

ちょっと甘くなってしまっていると思うけれど、と文香が差し出すカップから見える黒い水面に、窓からの日差しが反射してキラリとした。全国どこでも飲める味のはずなんだけど、今だけはとても手の届かない高級なコーヒーに見えてしまう。

「うん。ありがとう、文香ちゃん」

カップを受け渡す時に軽く触れた文香の指に、びくっと人知れずどきどきしながら、私は揺れる水面をじっと見つめる。時々ゆらゆらときらめくこの動揺が、私の手から与えられていることを意識すると、私の心をすっかり丸ごと見られているような視線を感じて余計に手が震えてしまう。

それを悟られないように、ゆっくりりと、ゆっくりりと、口を近づけて。

そうして、カップにちゅ、と口づけをした。陶器のように透き通る文香の唇に。

「甘い……」

「やっぱり、ちょっとお砂糖入れすぎちゃったわね」

「……そうかもね。すごく、甘いよ」

文香と私の唇が重なったところに少しコーヒーの色が残っていて、味見が終わってからも私はどうしてもその白いカップの縁から目を離せなかった。

そこにキスをする、何度でも痺れるような甘さを感じられるような気がしたから。

「紫織？」

文香に呼びかけられて、慌てて我に返る。薄手のコーヒーカップとソーサーがぶつかって、コーヒーがゆらりと大きな波を立てた。

「あっ、ありがとね！ コーヒー、美味しいね」

「もういいの？ 遠慮しないで、もっと飲んでもいいのよ」

私もカフェラテを貰うから、と、文香はテーブル越しに軽く身を乗り出した。伸ばされた彼女の手が厚手のカップに触れて、からこつ、と音を立てたあたりで、私はひゃつと素っ頓狂な声を上げてしまう。

「あら、いけなかった？」

「ち、違うの。ダメってわけじゃ……むしろ、その……い

いよ、私も貰ったもんね」

「そう？ ありがとう。なら、いただくわ」

大丈夫よ。別に普通のコトだから。まるで私にそう言い聞かせるかのように、文香は実に自然な仕草で私のカフェラテに口を付ける。

友人同士の回し飲みなど普通のことははずなのに、なんだか恥ずかしくて見ていられない。文香がゆっくりカップを置いたその音で、飲み終わったことを知る。

「カフェラテって、ミルクがコーヒーを抱きしめているみたいで好きよ」

「私も……好き、だよ」

持ち手に人差し指を当ててくるとカップを回すと、ミルクの模様が少し歪んで、それから元に戻る。カップに付いた重なる二つの唇の跡を見つめながら、ふわっと立ち上るミルクとコーヒーの香りを吸い込んだ。

「紫織、大学は楽しい？」

「なあに、急に。お母さんみたい」

大学では特に変わったことがない。サークルに打ち込むわけでもなく、普通に講義に出て、数人の友達とご飯を

食べて。たまに抜け出して、みんなで遊びに行ったりする。学生らしく、学問に生きているとは言いがたいけど。

できることなら、文香と一緒にの大学に行きたかった。そうしたら、もう少し変わった生活ができたかもしれない。私がせめて高校卒業までの間、彼女と上手に幼馴染をやりにきれていたのなら。

「今日の紫織は、何だか私の知ってる紫織とはだいぶ違うみたいだから。大学で何かあったのかと思って」

文香ちゃんだなんて幼稚園の頃みたいね、と笑いかける彼女に、私は笑顔で答えられない。おどおどとした追いつめられるような後ろめたさを見透かしているのだとしたら、多分そのことだ。

「それに、少し見ないうちに随分髪が伸びたみたい。卒業式の時はこれくらいだったのにね。明るい髪色は変わらないけど」

彼女は肩のあたりで手を横に振って、私がポブカットだったことを示す。少し、と言われて私はむっとした。

「文香ちゃん、少して言うけど、私達、一年以上会ってないんだよ？」

「知ってるわ。一年か二年くらいのことだから、少して言ったのだけど」

心がざわついた。きつと私がこのカフェラテだったら、全部零れてしまうくらいに。

ざわざわと私の心が音を立てて、差した影から黒いところがゆらゆらと這い出てくるような気持ちがあった。

「一年が少して、おかしくない？ 私は、ずっと文香のこと考えて、会いたくなって思ってたのに。文香は、私のことなんて思い出しもなかったの？」

「紫織？ 怖い顔をしているけど、大丈夫？」

気付くと文香が椅子から立ち上がっていて、私の顔を覗き込んでいた。

「あ……ご、ごめん！ 私のことを思い出せだなんて、私が言っちゃいけないのに」

「あなた、何か勘違いしているようね」

「……勘違い？」

私が聞き返すと、文香は、ええ、と答えてまた静かに椅子に座った。

文香はいつも冷静で、じっと私を穏やかに見つめてく

れる。私の暴走しかけていた感情が徐々に収まっていて、いつの間にか頬が濡れていることに気付いた。これは確かに、文香が心配するはずだ。

「私、あなたが思ってる以上に紫織のことを大事に思っているわ」

「だい、じ……？」

半分ほどになったカフェラテに、ぱつと波紋が広がる。それから私は何も言えなくなってスカートを握りしめ、下を向いてじっとその皺を見つめた。

「ええ、そうよ。大学生の間も、社会人になっても、お互い結婚しても、少なくとも私は一生のお付き合いをしていくつもりでいるわ。そう考えると、長い一生に比べたら、一年なんて瑣末な時間だと思わない？」

答えの決まっている問いかけに、私は無言で応えることしかできない。文香は少し冷めたコーヒーを飲んで一息置いてから、それにね、と言ってまたゆっくりと喋り始めた。

「あなたは覚えてるかしら？ 紫織が私を避けるようになってから数えるなら、そろそろ二年が経つよ？」

毅然とした口調が耳に響く。あの日の、夏の出来事が思い出されて視界が揺れた。

「高校の卒業から数えるなら、確かに一年と三ヶ月が経ったわ。でも、卒業式でちよつと声を掛けたくらいで、私が取り残された時間をリセットできると思う？ それじゃあまるで、高校時代の私との関係が丸ごと無かったことになったみたいで嫌だわ」

「あ……うう……ふ、ふみ……か……」

彼女の言葉を聞いて、驚き、悲しさ、悔しさ、嬉しさ……色んな感情がぼろぼろと溢れだしていく。

「ごめんなさい。追いつめるつもりはないの。あなたもあなたなりに考えていたのよね」

「ち、違うの。これは、安心しちゃって」

「安心？」

「文香ちゃ……文香は優しくして、突然連絡しても、こうして何も言わずに会ってくれるから。実際に会うまでは、誘いを受けてくれてすごく嬉しかったんだけど」

私は顔を上げて、流れる涙も気にせずに彼女を見つめる。きっとひどい顔になっていることだろう。

「やっぱり、あんなことをしておいて、本当に会って良
いのかなって思っちゃって」

あるいは実はもう私のことなどどうも忘れていて、二
人の間に何があったかなんて気にしてないのかも、とも
思った。忘れる——数年で私の記憶が本当に無くなるこ
は思っていないけど、記憶に残っていることと、彼女の中
に私が居続けていることとは違うから。

「でも、私の考えすぎだったって分かったから。安心し
て、落ち着いて、そのせいでまた涙が出ちゃったの」

えへへ、と尻尻の涙を拭いながら文香に笑いかける。

「私もね、あなたから連絡が来るまでは同じようなこと
を感じていたわ。突然部活に来なくなっと思ったら、最
近まで会話どころか連絡一つもないんだもの。嫌われて
いるか、そうでなければ忘れられているか、でしょう？」

窓から差す夏の陽射しがぐっと強くなって、窓枠の影
が木目にくっきりと映る。

「私はあなたみたいに感情豊かになれないところがある
から、あんまり信用してもらえないかもしれないけど、私
だって寂しかったの」

今はむき出しの感情をぶつけられて、実はすごく嬉し
いのよ、と笑ってみせたけど、そこに何かを含んでいる
ように見えた。

彼女は感情豊かになれないとは言っているけど、実は
文香は感情豊かな娘なのだ。でもそれは、高校生だった
頃の私の目に映る文香だったから。ずっと彼女から離れ
ていた今の私には、それが微妙な表情だとは分かっても
何かを読み取ることは無理だった。

「私は紫織を忘れてたりしないし、あのこともずっと覚え
ているわ。あなたは、どう？」

あのこと、と、言われて重いものがのしかかる。

「私も、忘れてないよ。全部、ちゃんと覚えてる」

脳裏に浮かぶのは、必死で抵抗する制服姿の女の子。今
も変わらないあの長髪が薄暗い部室の床に散らばって綺
麗に広がる様子が一瞬再生されて、すぐにかき消された。
私が心の奥底にずっと抱いている、文香への後ろめたさ
の根源。

「お互いに少し、すれ違っていたのかもしれないわね」

「ごめんね、文香。私が、距離を置くようなことしちゃっ

たから」

「あまり気に病むことはないわ。一年以上経っても、実際こうしてまた会えたんだし。改めて、今日は誘ってもらって本当にありがとう」

私こそ、来てくれてありがとう。そう言いたかったけど、どうしてだろう、口に出そうとするとまた涙が出そうになって言葉を飲み込んだ。言わなくても分かってくればいいのに。ずっと昔の私達は、そうだったから。

「私はあなたを待つてばかりね。いつも」

彼女が差し出すおしぼりを目に当てると、冷たく、じーんとして。その冷たさを補うかのように、溢れずに残った涙が熱く染みこんでいくのを感じていた。

*

喫茶店を出た私達は、三つほど店を巡ってから駅まで戻る道を歩いている。これは文香による街の紹介も兼ねていた。文香は実に楽しそうに店を案内してくれて、彼女自身いろいろな商品を買って回っていた。いくつか迷った中から精選したと言っていたから、本当に好きな店な

のだろう。

河川敷では、時折サッカーボールを蹴るドカッという音が響いてくる。駆けまわる小学生を横目で見ながら小気味良い音を聞いていると、何だか妙に落ち着いた。この土手の道が永遠に続いていて欲しいような、ずっと彼女とゆっくり歩いていたくなるような、そういう気持ちになる。

「今日で変なわだかまり、なくなったかな？」

「紫織はどう思う？」

「それなり、かな」

「じゃあ、それなりなんでしようね」

やっぱり胸に残る後ろめたさが残っているのは、わだかまりが消えたとは言えない。

でも、このもやもやを全部文香にぶちまけてすっきりするのも、私の迷惑なわがままだと思おうとそんなことできなかった。

歩いているうちに世界はどんどん橙色に染まっていく。空の下方に広がってぐっつ濃い影を残す水平線のような雲が、私を押し流そうとする大きな波にも、今にも崩れ

そんな大きな山にも見えてくる。

「夕日をゆっくり見るの、結構久しぶりかも」

「なんだか今日は、夕日がいつもの以上に輝いて見えるわ。誰かと感動的な景色を共有するのって、心躍るものね」

文香が立ち止まって眩しそうに空を見つめた。私も横に並んで目を細めてオレンジのパノラマに向き合う。

「私ね、大学で水彩を始めたの」

「水彩？」

「そう、アナログだね。なかなかいいものよ。心意気が変わると、道を歩いているだけで色んな風景が気になってくるの」

頭に浮かぶのは、文香が彼女の身長ほどある絵筆を軽々と振り回して軽快に舞う姿。周囲の真っ白けな線画の空間が、すらりすらりとなぞられたところから立ちどころに色づいていって、鮮やかな世界が辺り一面に広がっていくのだ。

「へえ、楽しそう。私も見てみたいな、文香の絵」

文香の世界の投影は、強すぎる光を放って私を焼け焦がしてしまうかもしれないけど、それでもいい。彼女の

目に見える景色は、きっとあらゆるものが輝いて見えるのだらうと思う。私が文香を見ている時のように。

「そう？ だったら今度、良かったらあなたのお家で描かせてもらえないかしら？」

「わ、私の家で？ 散らかってるよ？」

「それでもいいわ。紫織が普段見てる景色を、私も見てみたいの」

「別に、普通の景色しか見てないよ？ そんな、わざわざ来るほどのものじゃないっていうか。あつ、別に来てほしくないわけじゃないんだけど、電車代だってかかるし——」

ぐるぐると回る私の口の暴走を止めるように、文香が言葉を遮る。

「そんなに慌てなくていいわ。無理に押しかけたってわけじゃないの」

「えっと、その……絶対掃除するから。それから、ね？」

「分かったわ。機会があったら是非誘ってね」

いくらかの沈黙が流れた。

悪いことをしてしまったな、と思う。文香はこんなに近づいてきてくれるのに、どうして私は彼女に向きあう

ことができないんだらう。私は勝手に独りよがりで抱え込んでばかりで、こうすることがきつと彼女のためになると信じきっているみたいだ。

「ねえ、文香。私、気にしすぎてたのかな」

「そうかもね。私達はそれぞれあんまり変わってないのに、お互いは変わったと思ひ込んでいたのかしら」

それから、紫織の髪は伸びたけれど、と戯けてみせた。

文香は何も変わっていない。私から見ると限りの内面と外面では。たとえば、私には教えてくれない想い人に心を奪われていたとしても、ワンピースの下に私には教えてくれない恋人に乱暴をされた傷があったりしても、それは分からないけど。

彼女がずっと変わらずに、手を広げて私を待っていてくれればいい。もしそうなら、何も心配する必要がなくなるから。同じポーズをしている人形のように、ずっと私を見ていてくれたらいいのに。

「それにしても、紫織、どうして髪を伸ばしたの？ ずっとショートだったじゃない」

「うーん。深い理由があるわけじゃないけど、なんでだ

らうね？」

「忙しくて、切るのが面倒になっちゃった？」

文香が顔の前で髪を切るジェスチャーをする。右手をチョキにして、ちよきちよきと。

「ふふっ。私、そんなにズボラじゃないよ」

理由なんて初めから自分の中で分かっているけど、告げるかどうかはまた別だ。

どんどん鼓動が早くなるのが分かる。言うのなら、あくまで軽い感じに、流すように。

「文香みたいになりましたかっただのかも。そういう綺麗な黒髪にはなれないけど」

もっと言うと、寂しい思いをしている私に、彼女の面影を与えてくれるかもしれないと思ったから。

私の中で、憧れは恋と不可分だ。あの娘になりたい、こうなりたい、女の子同士のそういう憧れは恋愛と地続きになっっていると思う。男の子と女の子は互いに持つことのできないものを求め合うけど、女の子同士は互いに持つてるものに近づくことができるから。

これは憧れの吐露だ。綺麗な友人へのただの憧れ。で

も、同時にこれは――

「あなたは、私にはなれないわ」

――だから、そういうことを言われると全部否定された気がしてしまう。

一度涙が出た日はちょっとしたことでもまた泣いてしまいうようになる。せっかく晴れた日に乾いたアスファルトを汚すのは嫌なので、できるだけ明るい声で答える。

「そんなこと言わないでよ。私だって綺麗な大人の女性に憧れたりするのに」

「だって、私とあなたは違うし、あなたと私は違うのよ？」

「それは、そうだけど」

分かってる。でも、文香が手に入れられないのなら、せめて彼女に近づきたい。少しのチャンスにすがりついて文香を渴望してしまふ。

「ねえ、紫織」

と、文香が私の手を引いた。その手にぐいと引き寄せられて、私達はしかと向かい合う。彼女は私の手を握ったまま、もう片方の手で私の髪にそっと触れた。横から射してくる夕日がやけに眩しく感じる。

「私だって、あなたにはなれないの。だから、ずっとそのまままでいて。私になんか、なるうとしないで。私になりたいたなんて、そんな悲しいこと言わないで」

「ふ、文香。恥ずかしいよ」

瞳に広がる小さな宇宙をしっかりと見つめることのできる距離。ほつほつと模様を刻む虹彩のリングが、私にはこの上なく整った芸術品のように見えてならない。

私より少し大きい文香が私を見下ろすようにして、美しい瞳で私を射抜く。

「紫織。綺麗だわ、とても。あなたも、あなたと一緒にこの空も」

いつの間にか河川敷からは誰もいなくなり、静かに響く足音と、時折風になびく葉や枝がぶつかりあう音の他には何もなくなった。

風が吹く。黄色いシトラスの匂いが吹き飛んで、辺りに緑の香りが敷き詰められた。

明るい茶色の私の髪に、文香の黒い髪が重なる。そこに夕日が射してきらきらと輝く。文香と一緒の時しか見られないこの景色は、彼女まで輝いているように見える

ほどに眩しい。橙の光が頬に射した文香の笑顔は、私の頬まで赤くした。

ストロベリードール2

家に帰ったら、まずしなきゃならないことがある。

「ただいま、アヤ」

それは、アパートで待つアヤにただいまの挨拶をすること。

「やっぱり暑いね。アヤは大丈夫だった？」

ドアの隙間から外に出られなかった湿った熱い空気が辺りをぐるぐるしているキッチンを通り抜け、私はそのまま自室に入った。

私の家には部屋が二つにエアコンが一つしかないから、帰ってきたら間仕切り扉をガラリと開けてアヤの部屋から涼しい空気を貰うのだ。白く塗られたアルミの扉がひんやりとして気持ちいい。

「ちゃんとエアコンは動いてたみたいね」

「私？ 大丈夫。暑かったけど、文香と一緒にいたからあんまり気にならなかったよ」

ずっと歩いていたせいか、立ち止まると額に汗が滲み出してしまう。その上を、冷たい空気がさらさらと流れ

ていくのを感じる。

「寂しかったよね、ごめんごめん」

彼女の部屋はシンプルだった。勉強机とベッドとガラスのローテーブル。テーブルは水色のカーペットの上に。高校生になってから三十二型のテレビも入っていたのでそれも。もつとも、テレビは彼女の希望ではなくて入学祝いに親戚に貰ったものらしく、ほとんど使われることはなかったけど。

勉強机は小学校から、テーブルは中学校から、ベッドも小学校からだって言ってた。だから本当の彼女の部屋はここにはない長年の生活感に覆われていたけど、ここだってあの頃の、高校生のアヤの部屋だ。

ローテーブルに向かっていているアヤは、朝に私を見送った時のまま寸分も変わらない。

すべすべとしたシリコーンの肌も、すらりとした腕も脚も、綺麗な黒いストレートヘアも、桃色に艶めいた唇も、爪の一枚一枚すらも、等身大の彼女は私のことを待っていてくれた。

彼女がいつも着ていたレモンイエローのルームウェア

身に包んだ涼しげなラブ・ドールの茶色い瞳が、ずっと私に向けられている。この瞳は、今日見た彼女のものとは全く違うけど、これは私の中にいる彼女だから、これでいい。

「ね、アヤ。私、明日までのレポートがあるから一緒にやらない？」

「ここだけはずっと時間が止まっていて、私も高校生のままでいられる。」

「アヤはもう終わってるんだ。やっぱり計画的にやらなきゃダメだよね」

「分かってるって、もう。テスト期間くらい把握してるよ」
私もノートを広げる。何の変哲もない学習ノートには、誰にも見せられないアヤとの妄想日記ばかりが書き綴られていた。

私とアヤは両想いで、放課後はいつも一緒にいる。抱きしめたら、恥ずかしそうに抱き返してくれた。お互いを見つめながら「好き」って言い合っていたら、一時間経っていた。アヤは今日も良い匂いがする。

すりすりすると、シオちゃんは甘えん坊なのね、と言っ

て一緒に寝てくれた。私達はキスをして、朝までぐっすり眠るのだ。

「明日の放課後は何しよっか。毎日図書館で勉強するのも飽きちゃった」

「課題もないし、またゆっくりお喋りしたいな」

「えっ、明日も来ていいの？ うん、うん……そうだね、新作のお菓子も出てたし」

「分かった。買ってから持って行くね」

そこから会話が思い付かなくなって、ノートを駆ける手も止まってしまった。他愛もない会話を妄想するには心がざわつきすぎていたから。

「ねえ、今日のとてどういうこと？ 変だったよ、今日のアヤ。アヤを欲望のままに襲っちゃうような私に、あんな柔らかな笑顔見せちゃってさ」

もしかして、アヤは私のことが好きなの？ それって、私の好きと一緒？

私の中にアヤは二人いる。私と離れて今を生きる大学生の文香と、私と仲良くしてくれていた高校生のままのアヤ。今日は心がその二人に包まれて私は幸せ者のはずな

のに、どうしてか私の心は不穏な揺れが止まらなかった。「一生のお付き合いとか、寂しかったとか。それにあんな、キスの距離なんて……」

親友なら普通よ、と言われるかもしれないけど、そんな答えが欲しい訳じゃない。

彼女が家にやってきたのは、一人暮らしを始めてしばらく経った頃のことだ。

私は高校生の頃に、文香に顔を合わせられないようなことをしてしまった。か弱い少女に、自分勝手な欲望をぶつけたのだ。

それからは私は文香とほとんど話さなくなってしまう。たし、彼女がいる部活にも行かなくなった。文香とは違うクラスだったので、部活にさえ行かなければ不意に出くわすこともなくなった。

だから大学に進学してとうとう物理的に離れても、悲しいかなきつと心境に変化はないだろうと初めは思っていた。ところが、予想外にもその離別の事実が私の心にぼつかりと穴を開けていたとききに気付くことになる。話せなくてもすぐに手の届くような距離にいる、というだ

けで私は穏やかでいられたのかもしれない。

ずっと一緒だった幼馴染のことを忘れられなかった私は、どうにかしてそれを紛らわさなければならなかった。

現実と真正面から向き合うには、私の心は弱すぎたから。

そんな時に現れたのが彼女だった。一目見て、文香だと分かった。初めは当然気持ち悪さが勝っていたけど、結局どうしても文香の模造品を手放すことはできなかった。

どこから来たか？ どこから来たんだっけ。思い出ししてみると、朝起きたらいつの間にかそこにいて、ずっと私を見つめてくれていたような気がする。きつとそうだ。

現実から逃げて精神を保つにはあまりに歪んだ手段だったけど、これさえあれば私は外で前向きに生きていける。私はこの過去を留めた後ろ向きなジオラマにあまりにも依存しすぎていた。

だからこそ、しれっと平気な顔をして文香に会おうとした自分の行動も、予想外にもそこで得た文香の好意的な反応も、私の心をかき乱す。

私のこの想いさえ心の奥に押し込められさえすれば、また二人で心から笑い合える日が来るのかもしれない。も

うこんな歪んだ生活は必要なくなるのかもしれない。それはとても嬉しいことのはずなのに、そういう未来の果てにあるこの空間からの離脱を空想するだけで、きゅうと胸の辺りが痛み出す。

「聞いている？ 私さ、アヤのこと大好きだよ。一生、ずっと一緒にいたい。親友とか、そんな言葉で誤魔化す気はないから」

私がどんなに抱きしめても、彼女の腕はそれには応えてはくれない。聞こえてくるのは金属の骨格が軋む音ばかりで、私に愛の言葉は届いてこない。

「すぎ、すぎだよ……うう……アヤ、私、もっと……」

冷たいシリコーンの身体に、熱い涙は染みこむのだろうか。私の涙を全部吸い取って、彼女に魂が宿ればいいのか。そうして目覚めてから不思議そうに私を見つめる彼女に、私の唇の熱を流しこむのだ。この熱が彼女の身体に広がって、私の愛を知ってほしい。私も好きよと囁いてほしい。もっと私を熱い視線で見つめて欲しい。

シオちゃん、私、あなたが思ってる以上にあなたのことを大事に思っているわ。

「寂しいよ……ねえ、文香……」

じわりと身体が熱くなる。ゆらゆらとした感情の波が、心の縁を越えてとろとろと下着の辺りに零れていく。

「私のことが大事だなんて、どうしてそんなこと言うの？」
「文香も、私がいなくて寂しいんだよね？ だから大事って言ってくれたんだよね？」

そう言いながら、いやらしいところに手が伸びる。もっと、もっとと、彼女を巻き込んで身体を激しく揺らす。

「じゃあ、言って。言ってよ、好きだよって。私の目を見てよ……アヤ」

ふふ、シオちゃん。ありがとう、私も好きよ。

「んっ……アヤ、やだよお……すぎ、すぎっ」

泣きながら溢れる体液は、私の意志ではもう止まらない。私は親友を模した人形に発情するような、いやらしくて、気持ち悪い人間だから。

「あうっ……もっと、もっとして……ねえ……文香あ……っ」

私の手でしか動かない人形は、私がいなければ何もできない。彼女にしか寂しさをぶつけられない私も、彼女がいなければ生きていけない。本当は一方的な私の情欲

のはずなのに、まるで複雑に絡まった綺麗な共依存のよう
に見えてしまう。

寂しいのに、この感情さえあれば目の前の親友と繋がっ
ていられる。そういう意識が私をじわじわと興奮させる。
その不思議な関係が私にはとてつもない快感だった。

ストロベリードール3

「んう……朝か」

ぴぴぴと、不快な音が部屋に響いた。

「うううう……」

私は呻きながら何度かスマートフォンをいじくりまわすけれど、とうとうそれが原因ではないことを思い出し、煩わしい音を発する銀の目覚まし時計をぼしりと叩く。

「暑い……べとべとする……」

夏の目覚めは、アラームよりも部屋の暑さによってもたらされることが多いけど、昨日はずっと眠りに入る前に考え事をしていたせいで特に寝つきと夢見が悪かったらしい。寝ぼけた身体に汗で張り付いたTシャツがじとりとして嫌な心地がする。

窓を開け、軽く伸びをした。レースのカーテンが優しく揺れてから、湿った室内をよく晴れて乾いた空気が駆け巡っていく。肌にひやりとした心地の良い寒さがまわりついた。

「今日は文香が、来るんだよね」

あの日、文香との再会から二週間ほどが経っていた。

私の家に絵を描きに来たい、というのは社交辞令だと思っていたけれど、文香は本当に私の家に来たかったらしい。別れてじきに、都合の良い日を尋ねる連絡が来た。彼女も自分が何かしたのだろうかど気にしていて、なかなか連絡する勇気がなかったのだという。

ただすれ違っていただけの彼女と私の時間が、再び動き出した。

でもまだ私には、まだ後ろめたいものがあった。過去の私達の間のこともそうだけど、目下のところそれは、アヤについてのことだ。

二人の関係が変わってしまった今、これまでどおりではいられない。文香に屈託のない笑顔を向けられながら、その裏でアヤを抱きすくめて欲望を晴らしていることを、単なる人形遊びの趣味だなんて言うことはできない。

少なくとも今の私は、文香に対してこの生活を後ろめたく思っている。このままでは、きっと最後には破綻することだろう。

「あと一時間くらいかな……シャワー浴びちゃおっと」

文香にとっては単なる友人に会うためだけの一日かもしれない。でも、私にとってはそれを隠し通すか、さらけ出すかを選ばないといけない大事な一日になるはずだ。

*

びんぼう。来客を告げるチャイムが何度か鳴って、私は玄関へ向かう。

ドアを開けると、この前とは打って変わって黒っぽいパンツスタイルに身を包む文香が立っていた。肩には大きくて薄いバッグを掛けて、右手にもそれよりは小さい普通のバッグがもう一つ提げられていた。

「こんにちは、紫織。なかなか出てくれないから、部屋を間違えたのかと思ったわ」

「あ、文香。ごめんね、ちょっとシャワー浴びてたの。上がって上がった」

私の頭がまだ少し濡れているのは、ぼーとした頭で十数分呆けていた私の寝起きの悪さと、その割には遠慮のないシャワーの長さで、それに文香の予想外に早めの到着時間が加わった結果だ。

「散らかってるけど、くつろいでいってね」

「ありがとう。お言葉に甘えて、ゆっくり描かせてもらうわ」

本当はこの部屋も少し掃除をして、向こうのアヤも部屋の隅に移して目隠しにカバーでもかけておこうと思っただけで、全くそんな時間はなかった。どちらも人を招くには致命的でない分、文香を暑い外で待たせるのも悪いし。

だから今は少しだけどきどきしていた。割ってしまった花瓶が先生に見つからないか心配する類のどきどきだ。見つかったから弁解するのも、見つかる前に怪しまれるのも、どちらも避けておきたかった。

「私、ちょっと髪を乾かしてるから、先に作業していいからね」

「ええ、分かったわ。外の景色を見ているわね」

文香を残して洗面所に向かうだけでも少しどきどきが強くなる。彼女に限って、勝手に部屋を覗くことはないと分かっているのに。よく見知った幼馴染を疑っているようで、しかもそれが離れていた時間のせいだと思つと、

少しだけ嫌な気持ちになった。

*

戻ってくるのと、レースのカーテンがまとめられて部屋が少し明るくなっていた。窓から外からの陽射しが直接フロアリングの床に当たっている。文香がベランダに立っているのが見えて、私は窓枠を挟んで向こう側の文香に話しかけた。

彼女はその長髪をポニーテールにまとめ、その尻尾を作業の邪魔にならないように頭の後ろで時折びよこびよこ揺らしている。

「文香、外で描いてるの？ 暑くない？」

「陽は差してるけど、風が気持ちいいわ。あなたも来てみたら？」

文香の黒髪を揺らしてから部屋に入ってくる風が部屋を駆けていく。私もベランダに足を踏み出すと、床板が小さくきしっと音を立てた。確かに私の頬を撫でる風はそれなりに涼しいけど、さっきまでドライヤーで暖められていた私まで、文香のように汗一つかかずにいられる

ほどではない。

大げさに動きながら後ろから文香を覗き込むと、彼女は今は下絵を描いているところらしい。さらさら鉛筆を走らせる先を見ると、木の板にA3ほどの紙が貼られていて、端はねずみ色のテープで止められている。画板の端はベランダの柵に載せられて安定しているように見えるけど、鉛筆の位置と書き方に応じてたまにくらりと揺れた。

「こういうの、スケッチブックとかに描くんじゃないんだね」

「そうね。用意もなくスケッチブックに描いちゃうと、色塗りの時に紙が伸びて歪んじゃうから。描く前に、水彩紙を水で濡らして板に貼ってから、テープでピンと張るのよ」

水張りっていう作業なの、と鉛筆を走らす文香が少し得意げに見えて、私まで誇らしげな気持ちになった気がする。

「文香、楽しそうだね。私も水彩、やってみたくなってきたかも」

「それは嬉しいわ。本当にやる気になったら、言っただけね。いろいろお手伝いするから」

「うん。ほんとに楽しそう」

文香はさらに筆を進める。すらすら。しゅっしゅっ。顔を上げて風景の一点を注視してから、ささっとまた軽やかに鉛筆を動かす。さらさら。鉛筆と紙が擦れる音が心地いい。

普段何気なく窓から目を遣る何の面白みもない景色のはずなのに、それが文香の手で拾い上げられて白い紙に描き起こされていくだけで輝きを感じてしまう。価値がないと思っていたものの価値に気付くというのは、当然嬉しいんだけど気恥ずかしさが付いて回る。

住宅街の中にあるアパートの一室から見える景色はたかが知れているけれど、ちらほらと見える植え込みや家庭菜園の様子を丁寧を描き込んでいたり、夏の青空が広く取られているところを見ると、美しく見える景色の切り取り方を心得ているのだと思った。

と、軽快に進んでいた鉛筆の動きが止まる。後ろを向いた文香は、少し困った顔だ。

「描きに来てる身で言えたことでもないけど、やっぱり見られるのって恥ずかしいわね」

「いいからいいから。もっと見せてよ、文香大先生」

「ふふっ。なあに、それ。見ていただけじゃ上達しませんよ、紫織さん？」

そう言って、文香はまた作業に戻る。耳に届く鉛筆の音が少し速くなった気がした。

*

「そろそろ、ちょっと休憩するわね」

ぱたり、と音が立つように鉛筆を画板に置いて、文香が作業の中断を告げる。下絵の描き込みは大体終わったということらしい。陽もすっかり高くなって、まさに暑くなるうというところだ。

直射日光を一身に受けていた室内に戻ると、やはり熱がこもってむわりとした。私はまたカーテンを解放して、するりと窓にかぶせていく。吹き込む風がレースを揺らして床に作る影の模様を変えていった。

立ち止まって床を見つめる私とは対照的に、文香はテー

ブルの周りを二、三周しながら上を見たり下を見たり、何かを探しているようだ。

「こっちの部屋にはエアコンがないのね。室外機はあったみたいだし、あっちのお部屋にはあるの？」

「えっ？ あ、その……」

間仕切り扉を指差す姿を見て、私はどきりとする。好意的に見ればクローゼットの扉とも誤魔化せそうだったが、ペランダに出た上に、しかも室外機という誤魔化しようもない証拠を抱えた今ではもうどうしようもない。「ふふっ。私に見せられないほどに散らかっているのかしらね？」

「そういうわけじゃ、ないけど」

どう言えればいいのだろう、と思いつながら私は言いよぶ。ゆらゆらと足を左右に進めながら、何度も視線を行ったり来たりさせた。

「安心して。許可無く人の家を漁る気はないわ。エアコンがなくても涼しいし」

「べ、別に汚いわけじゃないからね？ 見せられないってことはないけど、なんか恥ずかしいっていうか」

「どうしたの？ 見てほしいのか、見てほしくないのか、分らないわよ」

そう言っ、文香はテーブルに着こうとした。私はそれを止めるように声を掛ける。

「……いいよ。開けてみてよ」

何故私がかんなことを口走ってしまったかは分からない。彼女に隠し事をしている罪悪感のせいか、あるいは、ほのかな期待に縋っていたのかもしれない。最近のアヤを見ていると心に湧き上がってくる、どんな私でも受け入れてくれるだろうという、妄想にも近い淡い期待に。

*

がらがらと扉が引きずられて開く音を聞きながら、終わった、と心の中で言った。

アヤの部屋は、厚手のカーテンから漏れる光が少し部屋を走っているだけで、涼しくて薄暗い少し不気味な部屋だ。そんな部屋の中で、文香は当然真ん中で存在感を放つラブ・ドールに注目して、それから不思議そうに部屋を見回す。

「あら、エアコンがついてるのね。えっと、これはお人形のお部屋？」

「う、うん。そんなところかな。私、人形遊び好きだから」
上擦った声で文香の背中に話しかける。見られていないのをいいことに、シャツの裾をぎゅっと握りしめても、緊張は少しも解けなかった。狭い部屋で、ばくばく走る心臓の音が文香まで届いてしまいそうだ。

「随分と大きなお人形なのね。まるで、本当の人間みたい」
そうなの、リアルでいいでしょ、と昨晚眠りに入る前に何度かシミュレーションしていた中から、誤魔化すに足る無難なものを選び出していく。

文香がしゃがみこんで、アヤの眼と高さを合わせる。まじまじとした視線は——当然だけど——アヤのそれとは交わらず、まるで彼女が動けないほどの恐怖にでも襲われてるかのように見えた。

「なんだか、私みたいな容姿をしてるのね」

「そ、そうかな……？」

部屋に風が流れ込んで、後ろから二人の髪を揺らす。

「もしかして、スケッチにでも使ってるの？ 確かに、よ

く見ていた人間ならイメージが湧きやすいかもしれないわね」

文香がしゃがみこんだままこちらを向いた。彼女の純粹な興味を帯びた視線が、アヤから私に移されたけど、やはり私もその視線に応えることはできなかった。

「……うん、そう、スケッチ。スケッチするのに使ってる。文香が芸術に夢中なのを見て、思わず買ったの」

「ふうん、そうなの？ でも私たち、会ってから二週間くらいしか経ってないけど、そんなに早く届くものかしら？ 買ったばかりのものにも見えないし」

言っつてすぐ、蛇足だったと思った。

私に向けられる視線に見え隠れする疑念のようなものが、やはり私にも動けないほどの恐怖を与える。嘘で塗り固めて誤魔化そうとしても、最後には全ての真実を明かされるのではないかという、そういう想像が私を駆け巡った。

「その、それはね……ち、違うの」

「まあ、別に矛盾を突いて困らせたいわけじゃないから、いいんだけど」

文香が立ち上がって、そのままぐるりと部屋を見渡す。視線は私から離れても、未だに突き刺さるようなものが心に残っている。

「でも、なんだかここにいと、高校生の頃に戻ってきたような気分になるわ」

ちくり、ちくり。テレビ、机、ベッド、カーペット。全部が文香の部屋と一緒だ。その通りだ。だってわざわざそうしたから。

「それに、このルームウェア。鏡を見てみたい」

ちくちくちく。文香が着ていたのと同じ、可愛らしい黄色のルームウェア。

「どうしたの、黙っちゃって？」

部屋をひとしきり眺め終えた文香が、振り返って私を見下ろした。

「な、なんでもないよ。別にそんなの、偶然じゃ——」

「ねえ、本当にこれ、スケッチのためのスタジオなの？」

私の言葉を遮る文香が、ぐっと顔を近づける。嘘への罪悪感を視線で貫かれているようでくらくらとした。首元からは、シトラスの香水と混じりあったむわりとした濃

い匂いがして、それがさらに私の視界を心地よく揺らす。

「違うよ。ごめん、嘘ついた」

「ショック。紫織も嘘をつくのね。じゃあ、何に使っているのかしら？」

私は黙りこむ。昨日はこの悪癖を隠し通すか、さらけ出すか、なんて大層なことを考えてみたけど、そんな決断をしっかりと下すのは私にはまだ無理だった。

「だんまり？ じゃあ……例えば、私とのおままごととか？」

直球だった。当然だ。もういくら誤魔化そうとしたところで、証拠が揃いすぎて誰だって分かっってしまうだろう。ましてや私を良く知る文香のことだ、かなりの確信と共に導いた答えに違いない。

こくり、と頷くと、文香はそっか、と小さく返した。

「私とのおままごとって、私から言っておいてなんだけど、楽しいの？」

「ね、文香。覚えてるよね？ 私はね、あなたに乱暴をしたから、あなたから離れなきゃいけなくなったの」

私は振り返って、壁に向かって話し始めた。文香がどんな表情をして聞いているかなんて、見たくなかった。

「でも……私、あなたのことが大好きで、離れてもあなたを忘れられなくて。その気持ちを、こんな人形にぶつけてるんだよ。バカみたいでしょ？」

あはは、と乾いた笑い声が部屋に響いて、自虐をより一層痛々しくする。私は文香の答えを待たずにさらに続けた。

「だからね、楽しいか楽しくないかって言われたら、寂しいし、全然楽しくないよ。でも私は、これに縋るしかないから」

今、文香はどんな顔でこれを聞いているのかな。そんなの想像も付かないし、例えばどんな表情だとしても私の心を苦しめることだろう。だからこの顔を見せない口上は、私だけがすつきりするためのものだ。

「気持ち悪いでしょ？ 自分でも分かっているの。今日だってこれ、最初はちゃんと隠し通そうって思ってた。こんなわざわざ見せられたって、文香を困らせるだけだし」
心が全部あらわになって、丸裸で縛られていく。

「今日はもう、帰ってくれる？ 私、もうどんな顔で文香と喋っていいか分かんないよ」

「気持ち悪いだなんて思わないわ。おままごとくらいなら、幼稚園児でもするじゃない」

「それは、そうだけど……」

「だけど？ だけど、どうしたの？ あなたの様子を見ると、何だかまるで——」

——まるで、気持ち悪いって、言われるのを待ってるみたいだけど。

ぱつ、と振り向くと、文香は余裕を帯びた優しい笑顔でそこに立っていた。私の隠したいことは、全部彼女も最初から知っているのだと言わんばかりに。

*

シオちゃんが、髪が舞い上がるのも気にせずに思い切り振り向いた。

彼女は分かりやすい。嘘だって隠し事だって、全部分かっちゃう。初めからこんなに話してくれるとは思わなかったけれど。

「やっとこっちを向いてくれたわね、紫織」

「なにそれ。気持ち悪いだなんて、わざわざ言っただけじゃないじゃん」

シオちゃんを見るとなんとなく伝わってくる。こうしたい、ああしてほしい。今だってそう、私に手酷く罵られることを期待しているように見えるのだ。

「でも、紫織が許可さえしなければ、私はここを開けることも、このお人形の様子を知ることでもなかったわ。それなのに、どうして開けてもいいなんて言ったのかしら？」
彼女は隠し事を全部教えてくれたのだから、私もしっかりと教えてあげることにした。

「本当は、私にお人形のことを知って欲しかったんじゃない？ それを見た私に、酷いことを言われたかったんじゃない？」

「そんなわけ、ないじゃん。隠し事してる罪悪感を消そうとしただけだよ」

「ふうん。そう、罪悪感ね。どちらにせよ、気持ち悪いけど」

気持ち悪い、ともう一度強調して言うと、びっくり、と彼女の身体が揺れた。その後には驚いた素振りを見せる辺

り、シオちゃん自身も気付いていない類の快感だったのだろう。

自分の心の黒くて恥ずかしい部分を私にさらけ出したせいで、普段とは違う気分を味わっているのかもしれない。
「じゃあ、その罪悪感ついでに、もう少しお人形を見せてもらっても良いかしら？」

「……勝手にすれば。もう、文香には降参する」

「もう。勝手に、だなんて言ったら、あなたのパートナーが悲しんじゃうわ」

彼女から、おどおどとした弱々しい接し方が徐々に消えているのを見て私は安心する。隠し事が明らかにされて自棄になったせいも、シオちゃんという私への罪悪感や後ろめたさが表に出てこなくなったらしい。

失礼します、と軽く一礼して敷居をまたぐ。部屋の中が凍りついているように感じるのは、ずっと冷房が入っているせいもあるけれど、やはり部屋のご真ん中に鎮座する大きなお人形が放つ非人間らしさのせいだろう。

そのお人形の前にはガラステーブルが置かれているので、私は横にしゃがんでから頭部の辺りを覗き込む。

「ええと、なんと呼ばいいのかしら？ お名前はあるの？」

「……アヤ」

私は思わず振り向いた。耳を疑ったのは、それは私を指す名のはずだからだ。

「もう一度、言ってくれる？」

「だから、私はこのお人形さんをアヤって呼んでるの。何回も訊かないで」

さっきシヨックだとわざわざ口に出した時とは違う、本当の衝撃が私の中を走っていった。あの頃私に向けられていたはずのあだ名が、いつの間にか目の前のお人形に奪われていたと思うと、何だか悔しい。

「そっか。だから私のことをアヤって呼んでくれなかったのね。操を立てるという意味ももってるのかしら」

「そんなじゃないよ。ただ、ここに居る時くらいあの頃を思い出したかっただけ」

あの頃、というのはシオちゃんが私を求めたあの日よりも前のことだろう。あの日を境にシオちゃんは部屋に来てくれなくなったから。

私がまた振り返ってお人形を観察しようとしたところ

で、ざあ、と寂しげな声を掻き消すように、急に外から雨が聞こえ出した。

「雨が降ってるみたい。夏の夕方は不安定なものね」

「……うん。窓、閉めてくるね」

シオちゃんの足音を聞きながら、私は目の前の芸術品を見つめることにした。

「なるほど、よくできてるのね」

小さな鼻に、ぷるんと光る桜色の唇。くると長い睫毛を携えた様子を見つめていると、急に眼をしばたかされたように見えた。それが急に雨で暗くなった部屋に灯された電灯の光のせいだと分かったあたりで、はっと我に返る。

すらりと伸びた手脚は、透き通るような肌で覆われていて、指先や関節の一つ一つまで美しい。身体の大部分はもともととした黄色い水玉の布地——私がシオちゃんが家に来る度に着ていたルームウェアによく似ている——に覆われていて全ては分からないが、これが誰もが求める理想的なボディというものなのだろう。

そこには、永遠の静けさと共に一連の完成した美しさ

がある。

しかしそれは、人間が本来持っている自然さをすっぱりと捨ててしまった、実に不自然な美貌だ。美しく見えるために限りなく洗練されたその体軀は、一見すると唯一無二の芸術品と呼べるように思えても、実は大量生産に向いた工業製品になるためにある程度の最適化を施してあるように見える。良く言えば作りやすい。悪く言えば、オリジナリティの無い部分が透けて見えてしまう。

もしかしたら人間だって工業製品みたいなものなのかもしれないけれど。

雨粒が叩きつけられる音が幾分柔らかくなり、シオちゃんが窓を閉め終えたとわかる。外から流れ込んでいた自然な空気が断ち切られ、優しさのない冷ややかな人工の風がお人形の髪を揺らす。それがこの部屋にはよく似合っていた。

「どんなふうに使えばいいの？ 触っても大丈夫？」

振り向いてそう訊くと、シオちゃんはきょとんとした顔。私がこんなに興味を示すのが意外だったとみえる。悔しいけれど私に向けられていたニックネームを受け継い

でいるんだから、観察しておいて損はない。

「普通の人に触るよりも、ちょっとだけ優しくしてあげて。怪我なんかしちやっても自然には治らないから。当たり前前だけ」

注意を告げるシオちゃんは、少し照れていたようだった。どうしてか、その様子を見てみるとあまり良い気持ちがない。

「分かったわ。ではまた、失礼しますね、アヤさん……」

私は指でお人形の頬を突付くようにして触れる。ぷにぷと、一見柔らかい感触が指から伝わってくるけれど、この下には生物らしさの欠片もない整然とした金属か何かの骨格があるのだろう。少しひんやりとする無機質な素材の上に形作られた脆い理想のような、不用心に触れたら全てが壊れてしまいそうな儂げなものを感じさせる。

右手で頬を包み込むようにすると、その冷たさがしかと伝わってくるようになる。この冷たさが彼女を非生物たらしめて、永遠を担保しているように思えてならない。

もし今私が気が狂ったようにして、このシリコンの皮膚をすばすばと切りつけてしまったら、彼女たちの世界

は壊れてしまうのだろうか。そうするだけで彼女の持つだろう永遠が終わりを迎えるのだとしたら、アヤの名は私に戻ってくるのかもしれない。

「ね、ねえ。そろそろ、やめてもいいんじゃない？ アヤも恥ずかしがってるし」

「あら、恥ずかしいのは紫織でしょう？ あなたが大好きな私が二人もいて、触れ合ってるんですもの。確かに何もせずには見ていられなくなっちゃうかもね」

くすくすと、あなたの痴態を見て笑っているのよと言うような声を浴びせた。

シオちゃんはそっぽを向いてしまつて、顔は見えないけれど、みるみる赤くなっているだろう様子が良く分かる。

「うう……い、言わないでっ！ いいから、早くアヤから離れてよ！」

「分かったわ。そろそろ休憩も終わりにしないとね」

私はお人形に一礼して、立ち上がって、振り返って……と、あれを忘れていた。

「えっと、そのノートは？」

木製の丸みを帯びた子供用らしい学習机——これもお

そらくは私が使っていたものを意識したのだろう——に、ありふれたA4三十ページの学習ノートが置かれている。表紙には黒いマジックペンで「IS」とだけ記されており、内容は推察できない。おそらく大学で使っているノートをここに置くことはないだろうから、初めに部屋を見回した時から何に使われているのか気になっていた。お人形の取り扱い備忘録か何かだろうか。

「あっ！ それは、ダメ！」

慌ててノートを取ろうとするシオちゃんをわざわざ素早く追いかけることもせず、私はゆっくりと机に近づいた。

「そんなに焦ってどうしたの？ まるで、壮大な犯行計画でも書いてあるみたい」

十六番目のノートは机を背にした彼女の胸に抱えられている。その様子が一冊のノートだけでなく机ごと守っているようにも見えて、引き出しの中にバックナンバーが保管されているのだろうと推測させた。

「これは黒歴史みたいなものだから、絶対誰にも見せられないよ。だって、こんなのもし文香に見られたら、また……」

「また、気持ち悪いって言われちゃう？」

私がそう訊くと、彼女は恥ずかしげに小さく頷いた。

「見ちゃダメなの？ それとも、見て欲しいの？」

じっと、瞳の奥を見つめるようにする。シオちゃんは
こういう見透かされているような視線に弱い。

「あ……う……み、見てもいい、けど……また、気持ち悪い
いって言われちゃう……」

シオちゃんは手に持ったノートを差し出しながら、も
う片方の腕で目を隠す。その証拠品をばらばらとめく
ると、日付と一緒にシオちゃんとお人形の会話録みたいな
ものが書いてあった。日記だろうか。

この日記では、私とシオちゃんが付き合っているとい
う設定らしい。厳密にはこのお人形となのだけど、それ
を通して私を見ているはずだから、私と言ってもいいだ
ろう。もつとも、偶像を通して見つめる私が本当の私と
は限らないのだけど。

シオちゃんが付き合っている『私』は、実に彼女と仲睦
まじげだった。手を繋ぐ、見つめ合う、キスをする。そん
なことは日常茶飯事で、時には同じ布団で眠ることもあ
る。朝は必ず『私』が早く起きて、目覚めるまでシオちゃ

んのことを見つめているのだという。

「このアヤちゃんは、夜になると動いたりお喋りして
くれたりするの？」

「ううん、それはただの妄想。アヤと一緒にいる時の妄
想を書き留めたノートなの。ここにいると、いろいろ考
えちゃうから。やっぱり、気持ち悪い……？」

「ええ、そうね。気持ち悪いわ。紫織がこんな変態だっ
たとは思わなかった」

「へ、変態？」

シオちゃんが下を向いて手をもじもじさせた。新しい
罵り文句も気に入らなかったらしい。

「親友を勝手に自慰のための妄想に使って、それをわざ
わざノートに書き留めているのでしょうか？ 私には、節
操のない変態にしか見えないけど」

変態と言われた時の歪んだ喜びも忘れて、親友か、と
今度は少し照れたようだった。結局、私には何を言われ
ても嬉しいのだろう。

「でも、紫織はこれじゃ、満足できないんじゃない？」
そう確信して、私は核心に迫ることにした。

*

「……え？ た、確かに、そうだけど」

人形とお遊びじゃ、満足できない。そんなの最初に言ったことだ。どうして文香が急にそんなことを蒸し返したのか分からなかった。

「だって、お人形は血を出さないもの。血だけじゃないわ。このお人形が、一滴だってあなたのために体液を出してくれたことはある？」

文香が一步前に出て、ずいど私を覗き込む。私は後ろに下がろうとしたけれど、机があるのを忘れていたせいで不格好に上半身を少しのけ反らせるくらいしかできなかった。

「そ、そんなのできるわけじゃないじゃん。人形なんだもん」

「そうよね。だから、紫織は絶対に満足できないの。違う？」

「えっ？ 人形に体液が通ってないと、私が満足できないってどういう……」

ここまですぐ口に出したところで私は、はっ、として、彼女が何を言わんとしているのかを理解してしまう。私が口をぱくぱくとさせていると、文香は私からぴよこりと跳

ねるように離れた。

文香が後ろで手を組んで腰をかかめてこちらを見る。じっと見られていると、まるで私が見世物であるかのようには思えてきた。

「関係あるでしょう？ 私の血を舐めて、挙句の果てに私を襲っておいで。その相手の前でとぼけようっていうの？」

「ね、ねえ文香。この話、やめない？」

そう言いながら倒した身体を再び起こすと、文香はすかさずすれ違うようにして私の耳元に口を近づける。くすっ、という笑い声が耳に当たって、身体の芯からくすぐったい感じが上ってくるようでぞくぞくした。

「大好きな人の体液に興奮を覚えるあなたが、体液のひと滴も出ないこんなお人形で満足できるっていうの？」

こうやってはつきり訊かないと分からないのかしら、という言葉に、私は目の前が真っ白になる。血の通った文香と血の通わないアヤが触れ合っている様子が思い出されて、その想像の中で文香だけがきらめく輝きを放っているように見えた。

ふっと、文香が私の耳に息を吹きかける。今度はわざ

と。当たるか当たらないかのくすぐったさがない代わりに、それはしっかりと私に直撃して、きらきらとした想像をかき消した。私はすっかり身体の力が抜けて、とすんと尻餅をついてしまう。

「ひゃうっ！ な、何するの……？」

「どうなの？ あなたは、このお人形で満足？」

私は引き出しに寄りかかって座り込んだまま、ふるふると首を振ってその質問を否定する。文香は私の視線に合わせてしゃがみこんで、言葉を続けた。

「そうね、不満よね。じゃあ、私ならどう？」

「文香なら、って？」

少しだけ高い文香の視線に応えるようにして、ちらりと彼女を見上げる。

「例えば、今キスをして、重力に任せてあなたと体液を交換するの。あなたが欲しかった私を、好きなだけ貪りたくはないかしら？」

「キス、してくれるの……？」

「ごくり。唾を飲む音が聞こえてしまわないだろうか。」

「いいわよ、あなたがしたいのなら。紫織からしたい？」

それとも、私がする？」

「……文香がして。文香にしてほしい」

「ええ。分かったわ」

にこりとした文香を見ると顔が熱くなって、見上げた視線が定まらなくなる。ほうと吐く息が熱い。どんな表情で彼女のキスを待てばいいのか分からなくなって、私は下を向いてしまう。

文香とのキス。彼女の初めては、私が強引に奪ってしまった。柔らかい唇と不規則な浅い吐息を器にして、とろとろとした唾液を夢中になっていくらでも掬い取った。あんな自分勝手な幸せは、後にも先にももうないだろう。思い出すだけで息が荒くなって、顔が熱くなって、何も考えられなくなる。

紫織、と呼びかけられてまた文香を見上げると、彼女の人差し指が私の唇に、一瞬だけついと当てられた。

「私からしてほしいのでしょうか？ 顔を上げて。目を閉じなきゃキスできないわ」

目を閉じると、すぐに文香の唇が私に触れた。私の首に手を回して、少しだけ高い位置から、ちゅ、として。何

度か唇が触れ合って、また、ちゅ、と音を立てる。

何度かついばむようなキスをしてから、ちろと文香が私の唇を舐めた。驚いて思わず目を開けると、文香とばかり目が合う。悪戯っぽい笑みを浮かべる彼女は、ダメよ、と声に出さずに言っているから、じっと私に熱い視線を送ってくる。初めはその視線から離れられずにいたけれど、とうとう恥ずかしくなって私は目を閉じた。

すると、すぐにまた彼女の攻めが始まる。今度はもう少し激しいキスだ。たらたらと文香のジュースが私の舌へと渡される。時折漏れる互いの吐息がどんどん激しくなって、私も文香も昂ぶっているのを肌で感じられる。

彼女の体液は舌からじわじわ広がって私の身体に入っているって、どろどろになって私と混じり合っているのだ。文香の言うとおり、私は大好きな文香の体液に興奮を覚えるいやらしい人間だから、そんな想像は私の身体にこない不快感を刻んでいった。

彼女とのファースト・キスを思い出して、それよりもずっと幸せな気持ち広がっていくのを意識する。お互いが同意してするキスは、触れ合う度に見えない気持ち

が交換されていくような気がしてもっと気持ちいい。私は文香から伝わる優しさに安心して抱かれていった。

「……………ふぁ……………」

つつ、と銀色の糸が引かれてすぐにぷつりと消え去った。

「私からするのは初めてね、紫織」

文香も、乱暴に私が奪いとった初めてをきちんと覚えていた。普段は凛々しくて、少し触れるのにも心高鳴る彼女が、あの時だけは私の下でされるがままになっていたのだ。あの光景が文香の中にも残っていると思うと、胸がきゅうとして、でも不思議な嬉しさを感じる。

当時の光景がリアルに思い出されて、文香のいなくなった唇が急に寂しくなった。

「も、もうおしまい？」

「物足りないの？ 大丈夫よ、キスなんていつでもできるから」

「いつでも、してくれるの？ じゃ、じゃあ今、もう一回して」

「なあに、興奮してきちゃったの？ 最初にお人形を見られた時は泣きそうな声で、帰ってほしい、って言って

たのに」

耳元で、気持ち悪いわね、と囁かれてまた身体の力が抜ける。

「でもね、今はダメ。作業が終わってないの。今日はもともと絵を描きに来たのよ？」

「そ、そんな……」

「私が一段落するまで、一人で我慢できる？」

ふるふる。私はまた首を振る。それを見た彼女は、紫織はわがままなのね、とくすくす笑った。私の浅ましさを嘲るように。

「じゃあ、お人形さんで発散したい？ それとも、私とそういうこと……したい？」

「文香。文香ともっとキスがしたいの」

私は力の抜けた身体を無理矢理起こして、文香に抱きついた。不意に私に体重を掛けられて、文香は私ごとバランスを崩して倒れてしまう。ちょうど押し倒したような形になって、まさに当時のままの構図である。あの時の私は、このまま強引にキスをしたのだ。どきどきとして、文香の唇から目が離せない。

「……っ！ ふ、文香っ！」

「ふふっ、紫織って本当に気持ち悪いのね。何度言ってもダメよ、まだ我慢するの」

今私が有無を言わさずキスすれば、そんな命令に意味はなくなってしまう。そうしてしまいたい。でも、そんなことはしてこないと文香は分かっている。

その笑顔は、私のことを弄んで楽しんでいるみたいだった。

*

「私をずっと好きでいてくれたの？ 私を襲ったあの時か、その前から」

「そうだよ。ずっと、好き。いつからかなんて、分かんないけど」

文香が水彩の続きをしながら、私に話しかける。私は体育座りで作業の様子を後ろからぼーっと眺めていた。さっきのキスは、その刺激をすぐに受け入れるには衝撃的すぎて、今になってやっと私の身体にじわじわといやらしさを植え付けていっていた。

早めの夕立だと思っていた雨は案外長引いてしまって、夏には似合わない灰色の空が辺りをすっかり暗くしている。

正直早く一人にしてほしいけど、本当は帰ってほしくなんて見られない。帰ってほしくないけど、文香が振り向けばすぐに見られてしまうような状況で一人で自分を慰めるなんて勇氣もない。ぐるぐるとした欲望が時々私の身体を震わせた。

「じゃあ、付き合っってほしいと言ってくれば良かったのに」

「そんなの、無理だよ。だって友達だもん」

「お友達だと、恋人になれないの？」

「女の子同士で付き合うだなんて、真面目な文香が許すわけないよ。私だって、文香がこんなに好きだなんて……最初は戸惑ってたし」

かちゃ、と筆を置く音がして、文香が振り向いた。正座のままでもこちらを見つめる不満そうな顔に、ばちっと目が合う。

「私にも、人相応に怠惰で不真面目なところくらいあるわ。紫織は私を完璧だと思いきすぎじゃないかしら」

彼女が真面目だから、友達だからなんてのは、私が勇氣を出せなかった言い訳だ。私は膝に顔を埋めてさらに言い訳を加える。

「ずっと長いこと友達やってきて、それを壊したくなかったの」

「友達だからダメって言うのなら、いっそのこと私と付き合っってみない？ お人形を使うよりは、満たされると思うけど？」

前方から聞こえる声に、私は抱え込む腕の力が強くなるばかりで、顔を上げられない。本当は願ったり叶ったりの提案だけど、手放して喜ぶ気にもなれなかった。

「紫織？」

「今付き合っって言ったら……キスしたいからとか、えっちしたいからとか、そんな理由になっちゃう。だから、やだ」
じくじくと疼く赤い傷口は、確かに文香を性的に求めているけれど、私の心はまだその欲望を許せずにいる。

「あら、私とセックスしたかったの？」

「例えの話だよ。キスは……うん、したいけど」

「じゃあ、セックスフレンドでもいいわ。キスフレンドっ

「て言えばいいのかしら？」

私は思わず顔を上げる。文香の頬に朱がさして彼女までもが発情して見えてしまうのは、きっと私の欲情の反映なのだと思う。今日の文香は私の知ってる彼女じゃないみたいだ。少なくとも、私には直視できないようないやらしさを孕んでいる。

「女の子同士でせ、セフレだなんて……て言うか、セフレ自体良くないよ」

「良くない、っていうのは、背德的ってことかしら。私、背德的なのも好きよ」

一度離れた膝の間に戻る気にもなれず、逸らした視線は文香の肩の向こうへと投げられた。ぼんやりと、今朝軽く片付けられたままのベッドが目に入る。

「文香。もしかして、大学でそういうことしてるの？」

「そういうことって、どういうこと？」

「身体だけの関係っていうの、良くないと思う。文香は綺麗だし、身体目当てで寄ってくる人もいっぱいいるとは思うけど、そんな、自分の安売りみたいな——」

「いやだわ、勘違いしないで？　こんなこと言うのは、あ

なただけよ」

文香が私の言葉を遮る。それから彼女は正座を崩し、這うようにして私に近づいた。私はちら、と文香の顔を一瞥してからまた自分の寢床に視線を落ち着かせる。

「それに、私達はずっと幼馴染として心を通いあわせてきたじゃない。今更身体だけの関係だなんて、そんなの無理に決まってるわよ」

四つん這いになったままの文香が下から覗きこむようにして顔を近づけるから、嫌でも目を合わせるようになってしまう。さっきよりも近くて鮮明になった文香の顔は、今度は確かにその紅潮を私に意識させた。

「じゃあなんで、セックスフレンドになろう、だなんて言うの？」

「恋人よりは、あなたが気軽に受け入れてくれるんじゃないかと思って」

文香が体育座りしたままの私の首に手を回した。上半身でのしかかるようにしてさらに顔を近づけて、彼女は耳元で囁く。

「私、これでも紫織を誘惑してるつもりなのだけれど、気

付いているかしら？」

膝を抱えた腕の辺りにむにゅり、と胸の感触が伝わってきた。暖かな柔らかさが文香がそこにいる実感を確かにする。ふわりとシャンプーの香りがした。

「わ、分かんない。知らないよ」

「でも、息が荒いわよ？」

「それは、身体が当たってて……なんかくすぐったいから」
文香はくすぐす、と笑ってから、身体ってこれのことかしら、と言いながら回した腕の力を強めて、さらにむにゅりと身体を押し付ける。

「ごめんね。こんなやり方しちゃって」

中途半端なキスで寸止めされた拳句に、目の前で餌をぶら下げられてるみたいだ。じくじくが、さらにじわじわと広がっていく。

「私ほね、紫織に素直になってほしいの。して欲しいことをして欲しいって言ってもらって、何でも叶えてあげたいの」

顔を耳元から離れた文香が、今度は私の目を見て話します。

「な、何でも……？」

「そうよ。身体でも、心でも、命でも。差し出す覚悟はできてるの。親友のためになりたいっていうのは、そんなに不道徳で不健全なことかしら？」

親友のためになりたいという言葉だけは、不道徳でも不健全でもないように聞こえるけれど、その言葉を放つ文香は目を離せないほどのいやらしさを見せつけている。

「でも私、人形に興奮しちゃうような、気持ち悪い人間だよ？ 文香だって、気持ち悪いって言ったじゃない」

「気持ち悪いだなんて思ってないわ。ただ、あなたがそう言ってほしそうにしてたから」

違おうかしら、とさりと髪を揺らす文香から、また心地の良い香りが届く。

「……ちょっと、どきどきは、したけど」

「あなたに不快な感情を抱くことはないから、もっと頼ってくれていいのよ。昔のことだとか、自分に言い訳なんかしないで」

「頼る？」

「ええ。例えば……キスしてほしかったら、目を閉じる

とか」

「……ん」

そう言われて、私はゆっくり目を閉じる。

文香がそれに応えて、軽く一回だけ唇同士を触れさせた。そんな弱い刺激でも、一つ一つの吐息が熱くなってくるのが分かる。それが文香に届いてしまわないか気になって、余計に息が荒くなってしまふ。

目を開けると優しく笑う文香がいて、ね、と小さく同意を促してきた。私は恥ずかしくなって、ぷいとそっぽを向く。

「文香だって、したいことあるでしょ？ 私にだって、頼ってほしいよ」

「そうね。じゃあ、早速だけど……お願い、いい？」

私は、お願い、と訊き返して、目をそらしたまま続きを待った。

「今日は傘も持ってきていなくて、それに、あまり絵も濡らしたくないの。だから、泊めてくれないかしら？」

雨はまだ降り続けている。湿度が高くなって乾きにくいのもそうだけど、この雨の中で帰って染みるの

は避けたいというのもっともだ。でも。

「絵を口実にするの、ずるい」

「あら、気付いちちゃった？」

傘を借りて絵は置いて帰ったほうが迷惑にはならないことなんて当然誰にでも分かる。それなのにわざわざ面倒な提案をしてくるのは、さっきそうしていたように、私が気軽に受け入れられるための優しさなのだろう。

「気付いても、気付かないふりをして騙されてくれると思っただけど」

「ちゃんとやってくれなきゃ、やだ」

私は、文香の目を見ないまま口を尖らせる。

「確かに、それもそうね」

文香はそうと言ってから、また耳に口を寄せた。次に来るだろう言葉への期待で、頬や耳に当たる髪の毛のくすぐったさをいつもより鋭敏に感じてしまふ。

あのね、と小さく囁いて、文香は言葉が続ける。

「紫織が好きなこと、もっといっぱいしてあげたいの。だから、泊めて？」

ストロベリードール4

夏の夜に包み込まれた部屋で、私達はベッドの上にいた。シャワーを浴びているうちに長くなると思っていた雨はもう止んでいたらしく、辺りはすっかり静まっている。陽が沈んだ後はエアコンの動きも弱くなって、隣の部屋も静寂を保っていることだろう。

向かい合ってベッドにべたりと座る二人。自分の荒い息遣いと、文香の静かな息遣いだけが純粹に混じりあって、一つの曲のようにも聞こえてくる。

と、文香が私の頬に手を当てて自分をみるように促した。シャワーを浴びてすぐの熱い頬がひんやりとして気持ちいい。

彼女はそろそろ始めましょう、と言わんばかりに真剣な目をしている。

「ふ、文香。やっぱりこんなの、恥ずかしいよ」

「今さら？ 私なりに、きちんとお誘いは出したつもりだったんだけど」

お風呂あがりの上気した顔で、文香は小首を傾げた。彼

女は自分で持ってきた黄色いチェックの綿パジャマに身を包んでいる。前開きの長袖のボタンは上二つが開けられて、たまにちらちらと覗く胸元の白い肌が眩しく見えた。

どうして着替えがあるのと訊いてみたら、準備がいいでしょと笑うばかりだった。始めからこうなることが分かっていたのだろうか。

「やっぱり、お人形としてるようなことでも、私とするのは恥ずかしい？」

「だって、セフレとか良くないって言ったその日に、これだよ？」

なんか私が流されやすい女みたいで嫌だ。もちろん文香が相手だからなんだけど。

「本心からの反論じゃなかったってことでしょうか？ 紫

織はえっちなだから」

「文香には、純粹な乙女の気持ち分からないよ」

「優柔不断な恥ずかしがり屋を乙女って言うなら、そうなのかもね」

くすくすと笑いながら、文香は私の頬から手を離して言葉が続ける。

「じゃあ、紫織が恥ずかしくないように私から脱ぐわね」
 そう言つて、文香は自分のパジャマのボタンに手を掛けた。ぷつぷつと錠前が一つずつ外されていって、徐々に黄色い布地の下に隠れた白い肌と淡い色の下着があらわになる。

「あ、あ……」

ちらりちらりと、ほんのりと赤くなつた肌が見える度に、私の目がそちらに向いてしまう。文香もその視線が分かっているらしく、ボタンをゆっくり外したり、時折裾をめくったりして私を焦らす。へそやくびれたウエストラインを見せつけられて挑発される度に、シャワーのせいでほかほかとした私の身体に別の火照りが加えられていく。

ボタンが全て外されると、文香は最後にするり、と腕を抜いてすっかり上着を脱いでしまった。腕から肩にかけての美しい白いラインに、私は溜息が出る。

「文香、綺麗……」

「やっぱり、あのお人形とは違う?」

「当たり前だよ。文香のほうが、もっと綺麗」

「ふふっ、嬉しい」

文香の暖かそうな肉体には、人形のそれとは違って何よりも命を感じることができた。文香だってアヤだって、どちらも綺麗だけど、今は文香に見とれていたい。

「さて、私は脱いだけど、紫織はどうするの?」

「……ま、まだだよ文香。脱ぎ終わってないじゃん」

「あら、下も脱いでほしいの? いやらしい。純粋な乙女なんて、よく言つたものだよ」

そう言つて文香は立ち上がり、ズボンに手を掛ける。今度は焦らすことなく、一気にその手を下へと引いた。引き締まった太ももやふくらはぎも目に入るけれど、ちょうど顔の高さにあるのは下着に包まれた彼女の聖域だ。

「ふ、文香っ! いい、よね?」

私は思わず文香の股に顔を埋めてしまう。すっかり焦らされて、もう歯止めが効かなくなっていた。鼻から空気を吸い込むと、少しだけ湿つた匂いがする。

「させてあげてもいいわ。でも、条件があるの」

条件、という言葉に私は文香の顔を見上げる。蛍光灯の逆光が表情を読み取るのを邪魔した。こうして彼女を

見上げて不思議そうな表情を浮かべている間も、文香だけは明るく光の当たる私の表情の移り変わりをよく見ているのだろう。

「私のことは、アヤって呼ぶの。いい？」

そして文香は、その条件を伝える。無理難題を出して諦めさせようというつもりではないらしいけど、それを受け入れるには少し抵抗があった。

「ど、どうして？」

「昔はあなたにそう呼ばれていたんだもの。呼ばれたって思うのはおかしいかしら？」

「おかしくは、ないけど。じゃあ、人形のアヤはどうするの？」

おかしくはない。でも、あの頃を思い出すのはお互いに辛いことだと思うし、昔のあだ名だとしても今人形に付けられているような名前を欲しがったりするだろうか。まるで生き物でもない人形に嫉妬しているみたいに。

「私がいるのに、お人形さんのことを考えてるのね」

「そ、そうじゃないよ。ただ……」

「いいわよ。紫織がそんなにお人形とえっちな話なら、

今日は諦めるわ」

迷っていると、文香が脅しにも近い言葉で私を突き放そうとする。興奮しきった今の私に、おあずけの宣言は脅しでしかない。文香にもそれは分かっているのだろう。

物理的に見下されている状況が、そのまま二人の力関係になってしまったみたいだ。

「あ、アヤっ！ 早く、しょ？」

「いいわよ、シオちゃん。疲れちゃうから、座ってもいい？」

私は媚びるような甘えた声で彼女に擦り寄った。口から出たアヤという名も、返ってきたシオちゃんという声も、私の中を駆け巡って胸を締め付けるような快感をもたらす。

太ももに回していた腕を離すと、アヤは立ったままパンティを脱いで、それから私の前に脚を開いて座った。

あらわになったアヤの秘所は、いやらしくてらてらと濡れていた。私の視線に興奮してくれていたのだろうか。一舐めすればいくらでも甘い露が溢れてきそうな光景に共鳴したせいかな、私の器からも大きな波を立てた情欲が溢れていくのを感じる。

「ほら。浅ましく犬みたいに這わないと、私の性器は舐められないわよ？」

アヤのそれにむしゃぶりつこうとしたまさにその時、犬みたいに、と言われて私の身体が動かなくなる。急この状況が恥ずかしくなった。

「聞こえてるの？ 浅ましく犬みたいに這って、私を気持ちよくするのよ」

「ね、ねえ？ せめて、で、電気ちっちゃくして？」

「ダメよ。あなたの姿がよく見えないもの。どうするの？ するの、しないの？」

「……し、します」

アヤの攻勢は止まない。結局私は、犬のように浅ましくアヤの性器を舐めることを意識させられながら、それをするのになってしまった。最終的に一番恥ずかしくて、屈辱的な選択肢を選ばされたしまったのだ。

べろべろと、舌で淫らな肉に突付くように舐めまわすと、とろけた汗が口に入ってくる。しょっぱいような、酸っぱいような、甘いような、不思議な味がするけれど、決して嫌な味ではない。いつまでも口で転がしていたくなる。

でも、大事なのはそこではない。私の興奮の根源は、この味自体よりも、屈辱的な快感よりも、むしろアヤの愛液が身体に入っているという事実にあった。大好きな彼女と一つになれるかのような錯覚に、私はくらくらしてしまう。

愛おしくなってそこに口付けすると、唇にぬめりが絡みついてそれがまた心地いい。そのぬめりを舌で舐めると、口の中でまたあの味が広がるのだ。

「唇に付いたのまで舐めちゃって……っふあ、まるで変態の舐め犬ね」

舐め犬、と言われて身体が熱くなる。舌先まで熱くなってしまったような気がして、それがアヤに伝わってしまわないかびくびくする。

「犬って言われて、興奮しちゃった？ 舐め方が激しくなったわ……んっ」

時折漏れるアヤの嬌声に、はあ、はあ、と息がどんどん荒くなる。これも犬のようだと言われられることを考えると、余計に息遣いが激しくなってしまう。べろべろとなりふり構わず舐めていると、さっきよりも白くていやらしい

蜜が大量に溢れてくる。アヤも気持ちよくなってくれていると思うと、それだけで奉仕しがいがあるというものだ。「シオちゃん、自分のを触りながら舐めてもいいのよ？全部見てあげるから」

ほぼ命令じみた提案に、私は素直に従う。

自分のいやらしいところに触れると、驚くほどに濡れそぼっていた。と同時に、電撃のような快感が一閃し、私は小さな悲鳴を上げてしまう。その痺れるような快楽を求めて手でまさぐりながらアヤの桃色を乱暴に舐め続けると、一人でしてる時とは——人形のアヤとしてる時とも——全く違う快感が体中を駆け巡る。

「ア、アヤあ……」

「シオちゃん、もう飛んじゃいそう？　ずっと焦らしてたもんね」

私はそれには答えられずに、快感の波に合わせて指の動きを激しくする。自分で慰めている下から、アヤのぬるぬるで犯されている上から、駆け上がってくる気持ちよさを全て絶頂のための刺激に回していく。

「っ！　あっ！　んっ……ああ……」

私のいやらしいところから全身にまっすぐ絶頂が突き抜けていって、その残り香が私の全身に残って時々弱いところを突付く。私はその間ずっとアヤの湿った唇にキスをして、その快楽が私を丸ごと覆い尽くさないように舌を蠢かし続けた。

「……っ、ふあっ……舐めるの、もうやめてもいいわよ。

お疲れ様、シオちゃん」

「はあーっ、はあっ……」

ぱたりと、その場にうつ伏せになる。気持ち良かったみたいね、というアヤの言葉にこくこくと頷きながら、私は肩で息をする。ぞくぞくと、快感の余波が時々身体を走っていくのを感じていた。

*

目を瞑って快感の波が去っていくのを待っていると、頭の上からかちかちと音がした。アヤが何かしているらしい。今度は道具でも使うつもりなんだろうか。

しばらくして上を向くと、彼女は右手に何かを持って私を待っていたようだった。

「あれ、アヤ？ 何を持ってるの？」

「シオちゃん。今から仕上げをするから、見ていてね」

「仕上げ？」

そう言うと、アヤは流れるように前腕の辺りをつうとなぞる。それが小さなナイフだと分かったのは、なぞられた線が赤くなり始めた時だった。

「な、何してるのアヤっ！」

「私の血が大好きなシオちゃんに、プレゼントをあげるのよ」

私は慌てて起き上がる。それとは対照的に穏やかな表情をしたアヤは、血の付いたナイフを持たせるにはあまりに不釣り合いだった。

「ば、馬鹿じゃないの！ 早く手当てしないと」

救急箱を持ってこようとすれば、さっきまで犬のように必死で動かしていた身体には思うように力が入らない。その間にも、アヤの左腕からは赤い体液がとくとくと流れている。

「あら、舐めてくれないの？」

「そんなことするわけないでしょ、ばっかっ！ 変なばい

菌が入ったらどうするのっ！」

「消毒したから大丈夫よ。唾液には消毒効果もあるっていうし」

どうしてか、アヤはすっかり落ち着いた様子で私に腕を差し出してくる。

傷口から垂れようとする雫が蛍光灯の光を反射してきらめいた。それを見た私は、早く手当てをしなきゃいけないはずなのに、ごくり、と唾を飲んでしまう。赤い条を見つめてしまうのをやめられない。

「そういう問題じゃ——」

「もっともらしいことばかり言うのね。そんなにえっちな目、してるのに」

私の言葉を遮って、アヤはにやりといやらしく笑った。また見透かすような視線で、私自身に私を辱めさせる。

「あっ、シートに垂れてしまったわ。もう、早く舐めとってくれないから」

せっかくシオちゃんのために出した血なのに、という言葉に、私はどうしようもなく興奮して、どうとう傷口の端から落ちようとしている雫を舐めとってしまった。

「ち、血が収まるまでだからね？　ばか。ほんとに」

「馬鹿って言われたの、久しぶりね」

口の中にじわりと鉄の風味が広がる。この雫が、アヤの中をぐるぐる巡っていたものの一部で、今度は私の中を回っていくのだ。こんなに幸せなことがあるだろうか。シートに二、三滴垂れた血痕を見て、もったいないと思っ
てしまうほどだ。

今度は傷口をべろりと舐める。切れた皮膚の感触と、そこから染む体液が舌尖に伝わって、私はまたぞくぞくと背中を走る快感を味わった。

丁寧に舐め続けると、段々と血の味がしなくなっていく。最後に傷に沿って一撫でしてから、私は満足して傷づくろいをやめた。

「そう、アヤは馬鹿だよ。私にこんなの、思い出させて」

「私の血の味、しっかり思い出した？　吸血鬼さん」

ちろちろと口の中に舌を這わずと、鼻から残った血の風味がふわりと抜けていく。

「すぐく、美味しいよ。アヤの血。誰にも渡したくない」

「案外落ち着いているのね。あの時とはだいぶ違うみたい」

本当はそんなことはない。今だって、もつとなりふり構わずむしゃぶりつきたいけど、どうしてもアヤの意思を無視して襲ったあの時の光景が邪魔をする。

「だいたい舐めきったから、早く手当てしよ？」

唾液って口の中の雑菌が入ってて実は危ないんだよ？腕から口を離してそう言うのと、アヤがすかさずまたナイフを握って最初の傷の近くを走らせた。

「な、何してるの、アヤっ！」

「ほら、まだ傷があるから、もう一回舐めてもらってもいい？」

「ア、アヤ……」

二本目の傷から血が滲みだすのを見て、何故か涙が出た。してはいけないことなのに、心の底から興奮してしまっている。二条の真っ赤な鎖から目が離せなくなって、まるで私とその鎖に縛られているかのようだった。

もう戻れないところまで来た異常に押し潰されそうになる。視界の中で、笑顔のアヤとその傷口から滲んだ血がさらにぼやけて広がっていった。

「こんなの、おかしいよ……アヤが笑顔で自分の腕を傷

つけて、それを私が舐めとっているなんて。こんなの……異常なのに……」

「異常なのに、興奮しちゃう？」

私はそれに答えるようにして、またシーツに落ちようとする血を舐めとった。

「ばかばか。ほんとに……ばか」

「私はあなたが私の血液を舐めて興奮していても、嫌だなんて思わないわ」

「アヤは、自分の腕に傷を付けるの……嫌じゃないの？こんなに綺麗な腕なのに」

そう言いながら見上げると、彼女は私に手を伸ばし、優しく何回も頭を撫でた。立て続けにやってきた非日常の中に突然安心がやってきて、ほぁ、と小さな吐息が漏れる。「心配してくれてありがとう。でも、言ったでしょ？何でも差し出す覚悟はあるって」

「何でも、するの？」

さっきもそう言ったわ、と言うアヤを見て、私の中で贅沢な欲望が首をもたげた。彼女の血で口は潤っているはずなのに、次に言おうとする言葉がもたらす緊張のせ

いか、すっかり口がからからに渴いてしまう。

私は身体を起こして、アヤの肩に手を置く。じつ、と今度は私がアヤを見透かすような気持ちで、その穏やかな目を見つめる。

「じゃあ、私のこと、好きって言ってよ。まだ、言ってないよね？」

「シオちゃん、好きよ。心の底から、大好き」

こうしたら、とアヤがにこりと笑う。余裕そうな姿が、さらに私を必死にする。

「まだ足りないよ。私のことが好きなら、付き合ってください。もっと私を求めて」

なんて身勝手なことを言っているんだろうと思う。でも、彼女に対して覚えていた罪悪感、徐々に消えつつあった。それがいいことか悪いことかは分からないけど。アヤは少し黙ってから、口を開いた。

「シオちゃん、私と付き合いますか？」

「う、うん。アヤ、私も——」

私の答えを待たずに、アヤは私を押し倒す。彼女の体液のフルコースを味わってふわふわとした私は、悲鳴を

上げる間もなく、アヤにされるがままになって三回目の長いキスをすることになる。ちゆるちゆると愛液よりも甘い汁を流しこまれて、私はまた熱い吐息を漏らすことしかできなくなった。

「ねえ、シオちゃん。私と付き合ってくれる？」

「っ、付き合います……ふあ……」

やっぱりアヤには、勝てない。

ストロベリィドール5

それから何回か私達は逢瀬を繰り返して、その度に彼女の左腕の傷を増やす異常なセックスをした。アヤは長袖の服ばかり着るようになり、半袖の時も黒いアームカバーを着用している。それも当然だ。出来て数週間も経たない生々しい傷が何本も刻まれているのが見つければ、すぐに彼女の生活にも影響が出てくるだろう。

彼女はいつも笑顔で自分の腕を傷つけた。まるで痛みを感じていないかのようだけど、傷口を舐めるときに聞こえる小さな悲鳴がそれを否定する。

アヤは、毎回のデートで舐め終わる度にありがとう、と言って私を抱きしめるのだ。私にはアヤがどうして笑顔でいられるのか分からなかった。それでも私の心と身体はアヤを求め、彼女に求められるままに流れる血を吸った。街の中でも、赤い色を見るとドキドキした。そこからつう、と血が流れ出して落ちてしまうんじゃないかと思つて目が離せなくなる。

こんな異常なこと、やめなきゃいけない。いつかは誰

かにバレてしまうから。そんな時に白い目で見られるのはきつとアヤの方だろう。そう思っても、妖艶な笑みで自分の腕を切りつけるアヤの魅力に、ずぶずぶとハマってしまっていた。

今日もアヤとデートの予定だ。デートとは名ばかりで、いつもホテルか、私の家で抱き合つてアヤを傷つけるばかりだけだ。

でも、待ち合わせの時間になっても、アヤは広場に現れない。私が遅刻するのはよくあることだったけど、アヤが遅刻するのは珍しいことだ。

*

「アヤ、遅かったね」

「ごめんなさい。ちょっと寝坊しちゃって」

それから十分ほど待つて、アヤがやってきた。アヤも寝坊するんだ、と言おうと思ったけど、私も完璧じゃないのよ、という声を思い出して言葉を飲み込んだ。アヤだって人間だもん、遅刻くらいする。

「大丈夫だよ。アヤだって、たまにはそういうこともあるよ」

るよね」

「ええ。私が完璧なお人形だったら、寝坊なんかしないのに。ごめんね、シオちゃん」

「……どうして急に、人形の話になるの？」

ぼつりと呟いた言葉に引っかけた、私は訊き返す。

アヤが完璧な人形じゃないから謝るだなんて、そんなの変だ。私がアヤを人形の代わりにしてて、アヤがきちんと代わりを務められないから謝ってるみたいじゃん。

「あら、そうでしょう？ シオちゃんは私のこと、血が出てしゃべるお人形くらいにしか思っていないじゃない」

「な、なにそれ……やめてよ」

「違うの？ 私の腕をこんなにしちゃって」

そう言いながらアヤは両腕をこちらに差し出してくる。長袖を着ているから見た目には分からないけど、私が血をねだって彼女自身に付けさせた、幾条もの傷のことを言っているのは間違いなかった。

「対等な恋人が、こんなことするかしら？」

「それは……」

突き出した腕がそのままこちらに伸びて私の心臓を突く

かのような想像を広げさせて、私は何も言えなくなった。

「最初の傷は私がやったことよ？ でも、その後に血を啜らせてほしいってねだってきたのはあなたじゃない」

私は、往来の中で私は泣きそうになる。自分の瑕疵を責められて、責任も何もなく身勝手な涙を流す子供のよう。

「私の痛みなんて気にしないで、自分の好きなだけ私を舐めまわしちゃって」

「ご、ごめん。私、アヤの気持ちを考えてなかったよね」
今すべきことは泣きじゃくって責めを回避するようなことじゃない。私は頭を下げて、素直に謝罪する。別れよう、か、距離を置こう、か。どちらにせよ調子に乗った私への罰があるのは間違いないだろう。

「でも、いいのよ。私はあなたが好きだから。気にしないで」

「えっ？」

と、思ったら、アヤの口から発せられたのは、意外な言葉だった。

「いい、の……？ 怒ってたんじゃないの？」

「どうして、怒らないといけないの？ 毎回激しくして、痛くしてくれて嬉しいのに」

頭を上げると、アヤは不思議そうな顔をしていた。

「痛いのに、嬉しいの？」

「そうよ。あなたの舌が傷口に当たると、脳が痺れて痛みを感じなくなるの」

痛いのに、痛くないのよ、と言う彼女の目が少しだけ虚ろになったように見えた。

「ア、アヤ……？」

「私はシオちゃんのこと、それくらい好きなの。ね、シオちゃんは？ 私を人形じゃないと思ってくれてるシオちゃんは、私のこと、どれくらい好きなの？ 教えて？」

アヤが私を抱きしめて、立て続けに耳元で囁いた。広場のど真ん中でアヤに密着されて身体が熱くなる。

「や、やめてよアヤ。恥ずかしいよ……」

引き剥がそうとしても、アヤは私を離してはくれない。私を痛いくらいに強く抱いて、諭すように続けた。

「私は、あなたなしじゃいられないくらい、シオちゃんのことを好きよ？ だから、私は人形でいいの。あなたの

そばにいられるなら、それでいいの」

「や、やだよ。そんなこと言わないでよ、アヤ」

「シオちゃん、泣いてるの？」

ぼろぼろと、いつもは堪えられるはずの涙が急に溢れ出してきた。私はアヤの腕の中で声を上げて泣き出してしまった。広場にはまだ人がいたけれど、もう耐えられない。

彼女が人形になって私だけを見られる、そんな未来はすごく幸せだ。

でも、人形に成り果てたアヤはもう二度と自分の意志で動くことはないだろう。そういう、もう元の場所に帰れない、元に戻れないような未来を想像すると、どうしても、きゅう、と心の大事な部分を握りしめられたようになって苦しくなるのだ。

アヤに付けられた傷が、ただ左腕に痛みを与えるだけじゃなくて、彼女の心も不可逆に変えていつている。それをまざまざと見せつけられて、涙が止まらなかった。

*

このあと、私はアヤに無理を言って、普通のカップルみたいにデートをした。映画を見て、カフェに入って感想を言い合い、夕食を食べて、公園でキスをする。私はアヤとこんな普通のことが出たのだろう。こんな風に、アヤを傷つけなくて済むことを。快感で胸が痛くならないようなことを。いつでも元に戻せるようなことを。

帰り際に、もう、あなたを傷つけるのはできるだけやめにしようね、と言うと、アヤは少し黙った後にそうね、と軽く笑う。

なんだ、「普通」に戻ることは、存外に簡単なことなんだと、にこにことするアヤを見ながら私は安心した。

ストロベリードール6

あれからまた数週間が経った。

アヤは休日になると毎週のように私の家に来るようになった。恋人なんだから当然でしょ、という言葉に私が頬を赤くすることなど気にせずに。

もう腕をに刃を入れたり、血を飲んだりするような、そういう危ないことは自然にしなくなっていたから、アヤは水彩をして、その横で私は課題をするのが大半になった。遅くまで作業をした後に何度かキスやペッティングに及んだこともあったけど、彼女のラブ・ジュースは私に中途半端な潤いしか与えてくれなかった。

それでも私は幸せだった。彼女がそばにいて、何かに打ち込んでいるのを見ることが出来るなんて、ずっと前の私には想像がつかなかったから。

透き通るような世界に筆を走らせているのを課題そっちのけで見ていると、アヤは課題をしていないことに怒っている素振りを見せながらも、今仕上げている作品について饒舌に語ってくれる。川の辺りを歩いている時に、こ

れが綺麗だったから、とか。街を歩いていたら、この奥行きがぐつときて、とか。

今描いている絵は、見た瞬間の感動をよく再現できそうな自信作になりそうだって言っていた。私はそれに素直な期待を寄せている。

でも、こういうことを楽しそうに私に告げるアヤの様子から、私にはない輝きや純粹さを見出してしまふ。そこには、隣に私がいる想像ができないほどにきらきらした彼女がいた。そのままアヤが私を置いて駆け出していく様子を思い浮かべて、すごく不安になる。

「ねえ、アヤ。アヤはずっと私のそばにいてくれる？」

画用紙に筆を走らすアヤの様子を後ろから膝立ちで覗き込んで、私はぼつりと呟いた。

「急にどうしたの？ 私が水彩ばかりしてるから退屈しちゃった？」

アヤは筆を動かしながら、こちらを見ずに平然とそう返した。永遠の未来を疑うべくもないというようにして。「そ、そうじゃないの！ ただ、私は何も持ってないし、アヤにだってもう何もあげられてないから。どうして私

のそばにいてくれるのかなって思ってた」

「ふうん……そっか、なるほど。シオちゃんもそういうことを考えるのね」

アヤが紙から筆を離して、それからゆっくり洗ったり拭いたり、いくつか作業を終えてからパレットにぱたりと筆を置いた。

そうして、彼女は振り返って座ったまま私に前から抱きつく。私は抱きしめ返す気力も持たず、力を抜いて彼女に身体を預けると、ふわりと髪の毛の良い匂いがした。

「良かったらお話をお聞きますよ、紫織さん」

アヤの楽しそうな声が耳をくすぐる。私が悩んでいるのに、とは思ったけど彼女なりに気遣ってくれているのだと思うと、また身体から力が抜けた。

「嫌なことでもあった？」

「なにもないよ。幸せすぎて、だから怖い。せっかく血を舐めるのをやめて、普通のカップルみたいにして、普通のカップルの幸せを楽しんで……」

彼女が見ていないと分かると、最近は何事もなく涙が出るようになった。

「でも、結局根っこに『女の子同士』っていう絶対に逃げられない異常があるって分かっちゃって。だから、すごく怖い、怖いよ……アヤ」

普通に近づけば近づくほど、当たり前だったはずのことがどんどん異常に思えてくる。

「異常なんかじゃないわ。私達は心も身体も通じあっているって、言ったでしょ？」

彼女の手が私の頭に触れる。なだめようと思っているなら、それは間違いだ。アヤの視線がないところで、アヤのことを深く考えると、こうして私の心にはいくらでも雨が降るんだから。

「ごめんね、アヤ。私、重いよね」

「泣かないで、シオちゃん。構ってほしいなら、別に私が作業してても、後ろから抱きついて無理矢理ベッドに連れて行っていいのよ？」

「私、構ってほしいわけじゃないの。ちゃんと聞いてよ、アヤ」

耳元で囁くアヤを引き剥がすと、彼女はやっぱりいつもと変わらない穏やかな表情でいた——ただ一つだけ、目

尻の涙を除いては。

「あ、アヤ……？ もしかして、泣いて——」

アヤも泣くんだ。そうだよ、女の子だもん。

そう言うおうとする私の口を塞ぐようにして、彼女は私を胸に抱く。無理に引っ張られて私もその場にべたんと座り込んだ。下着の硬い感触と、その奥の柔らかいものの感触が、むぎゅりと顔を覆う。少し湿った柔軟剤の匂いを鼻に吸い込みながら、今度は私も抱きしめ返す。

「ごめんね、私がシオちゃんを手放すなんて、そんなこと考えたこともなかったから。私のことで泣くほど悩んでくれるなんて、嬉しいわ」

「悩むよ、アヤのこと好きだもん」

アヤだって泣いてるじゃん。もごもごと胸に向かって話しかけると、熱い空気が顔にまとわりつく。

「でも、あなたこそ、私から離れていっちゃわない？」

この距離でなければ聞こえないほどの、いつになく自信のなさそうなか細い声に、私はまた泣きそうになる。

「そんなこと、しないよ。どうしてそんな悲しいこと言うの？」

「私も、そんな悲しいことを言われたのよ？ ちょっとくらい意地悪させてちょうだい」

胸から顔を離してアヤの顔を見上げると、もう目尻の涙は消えていた。

「アヤ、怒ってる……？ ごめんね？」

「ううん、怒ってるわけじゃないの。私の不安も解消したいから、口実にしただけ」

そう言いながら、私の手を握る。アヤが私の眼を見つめながら触れる手は、私に安らぎを与えてくれた。

「不安？ アヤも、不安になるの？」

「シオちゃんは本当に私を完璧だと思ってるのね。私にも、ちゃんと人間らしく脆いところがあるんだって、この前も言ったでしょう？」

「そうだったっけ？ でも、なんか嬉しいかも、そういうの」

完璧じゃないアヤは、何だかすごく愛らしい。可愛らしい。何でもないことなのかもしれないけど、そんなアヤを見れたのが私にはすごく嬉しかった。

「シオちゃんに、綺麗って言われたことはあっても、可愛

「いだなんで言われちゃったのは初めてかもしれないわね」
 「言われ慣れない言葉で褒められるのはすごく照れるわ、
 とはにかんだ。」

「じゃあ、可愛い可愛いシオちゃんの恋人から、一つ訊
 いてもいいですか？」

「なんでしようか、可愛い可愛いアヤさん、と彼女に合
 わせて戲けると、今度は一転して真剣な表情になった。」

「シオちゃん、あなたは……好きなだけ血を飲ませてく
 れるような、とっても可愛らしいお人形さんみたいな娘
 に言い寄られたら、ついていっちゃわない？」

「……え？ な、なにそれ」

「シオちゃんがいくら血を吸っても罪悪感を覚えないよ
 うな……本当のお人形さんみたいな娘には、私はなれな
 いみたいだから」

「私、血が好きなんじゃないよ？ アヤ、あなたのだから
 好きなんだよ？」

「普段より少しだけ濡れたアヤの目を見て、私はそう言っ
 た。アヤは少し黙って、また私を抱きしめる。うん、うん
 と何かに納得したように何度か頷いた。」

「そんなこと、言われなくても分かっているのね。意地
 悪言ってごめんさい」

「今度はアヤの方から私を離れて、私の目を見て続ける。」

「やっぱり私も、血を吸ってもらえなくなっからずと
 と不安みたい。血を捧げて、それであなたがずっと私を
 見てくれる保証があるなら、いくらでも差し出したいと
 思ってるくらいだもの。もうしないって言ったのね」

「……この先ずっと一緒にいるとしても、いつかは終わ
 りが来るよ」

「私はその視線に応えきれずに床に目を遣る。アヤの不安
 そうな顔を見ていたら、私まで泣いてしまっさうだった。」

「それは死という意味かしら、と訊かれて私は頷いた。」

「アヤが私のお人形さんになりたいとしても、きつと本
 当のお人形さんにはなれないよ。私だって、いつかは絶
 対死んじゃうんだし」

「二人の間に沈黙が流れた。死んじゃう、と口に出した
 せいで、私の涙は急に限界を迎えてその静寂へとぼろぼ
 ろ溢れだしてしまう。」

「ねえ、アヤ、どうしよう？ アヤが先に死んじやった

ら、私、どうすればいい?」

「どうしようもないわ。本当に、誰だって、どうしようも」
女の子同士だと互いの喪主にもなれないと聞いたことがある。そういうのって、あんまりだ。アヤの言うとおり、本当にどうしようもない現実には力が抜けてしまう。

アヤはまた少し間を置いて、それからぼつりと続けた。
「でも、そうね。三十五日後に、あなたも死んでくれたら嬉しいわ」

「三十五日?」

訊き返してからすぐに、八月のアヤと九月の私、二人の誕生日の差なのだと分かった。

「同じ長さを生きて死ぬんだもの、きつと天国でも一緒になれるんじゃないかしら?」

「じゃあ、私が先に死んじゃったら、アヤはどうするの?」
「あら、私の腕をこんなにしといて、私より早く死のうっ
ていうの?」

そんなの考えたこともないことね、とアヤは冷たく言い放つ。私だってアヤのいなくなつた世界のことなんて考えたくもないけど、私の欲望のためにいつ死んでもおか

しくない綱渡りを繰り返させてきた手前、何も言い返せなかった。

「シオちゃんが今ここで私の胸を一突きしてくれたなら、そんな心配はなくなるのにね」

「ひ、一突き?」

「ええ。私の胸を一突きしたシオちゃんが血を吸い尽くして、それから三十五日間の逃走劇を始めるの。逃げ切つたあなたは、私を突き刺したそのナイフで自害するんだわ」
「そ、そんなのダメだよ。いくら背徳感が好きだとしても、破滅的すぎ」

そうは言つても、そのシチュエーションは私の目にもかなり魅力的に映る。見つかつてからは、きつとニュースや新聞がいかに私が猟奇的であつたかを口を揃えて報じるだろうけど、そんなのアヤと私には関係のないことだ。
「大丈夫よ。今のところはただの一妄想でしかないわ。でも、興奮しない? 私の血が、私の命が全部あなたに飲まれていくの」

私が、目に光を宿さなくなつたアヤの首筋に齧り付いて、獣のように血を飲んでいく。必死に、まるで私がこれ

から彼女と天国で会おうための儀式であるかのように。

「ふふっ。また舐めたくなっちゃった？」

こくり。私は頷いて唾を飲んだ。アヤはくすっ、と笑う。

「もうしないって言ったのに？ シオちゃんのえっち」

居ても立ってもいられなくなって、アヤの手首を取って床に押し付ける。私の手がテーブルにぶつかって、床に描きかけの絵ががたりと落ちた。

私はそれには目もくれず、アヤをじっと見つめる。アヤも完成前の水彩画のことなど頭にないかのように、私の視線に応え続けていた。

やっぱり私には、普通に戻ることなんて無理なんだ。赤いものを求めるこの胸の高鳴りには、どうやっても嘘はつけない。

「アヤ、私が想像しちゃうって分かってて、わざとやってるでしょ」

「ふふっ。随分と怖い目をするのね。ちょっと挑発しただけでこんなになってくれるなら、挑発しがいがあるっものね」

私はアヤの拘束を解いて起き上がる。押し倒されたに

も関わらず余裕の笑みのアヤを見て、必死に力づくで彼女を求めようとしている自分が急に恥ずかしくなった。

「そうやって誘ってくるなら、私、本当にしちゃうよ？」

「いいわよ。飲みたいの？ それとも、ここ、刺しちゃうたい？」

アヤもむくりと起き上がる。右手の人差し指で、傷の残っているだろう腕を、それからまだ誰にも傷つけられていない胸の辺りを指差す。私はそれを見てまた、こくりと誘いを受け入れた。

「胸には刺さないからね？」

「知ってるわ。シオちゃんはとっても優しくて臆病なんだから」

そう言っアヤは、大事にしてくれてありがとう、と芝居じみたお辞儀をした。

「じゃあ、今度はシオちゃんがして。あなたが大事に思ってくれてる私を、あなたの手で傷つけて、縛り付けて」

それからアヤは彼女の鞆を指差して、中の道具を使うように伝えた。私は小さめの果物ナイフと消毒用具を取り出して、アヤにはヘアゴムを手渡す。

彼女はするりと流れるような動きで髪をまとめて、それから上着を全部脱いで下着姿になった。黒の布地が真っ白な身体を引き締めて更に美しく見せる。血が付いても目立たない黒いランジェリーは、まるでこの事態を予測していたかのようだ。

「アヤ、すごく綺麗だね」

「この前みたいに、可愛いとは言ってくれないのね」

「何でも可愛いって言うわけじゃないもん。今のアヤ、美術品みたいですごく綺麗だよ」

「ありがとう。ほら、切る前に消毒して？」

私はアヤがそうしていたように、アルコールを含んだ脱脂綿を切るようにして果物ナイフを通す。消毒を終えて輝きを増したそれは、鞆から取り出した時よりは幾分か冷ややかに見えた。それとは対照的に、服の下に隠れていたアヤの真っ白な腕には生々しく幾条にも赤い鎖が走っている。その一つ一つが熱く、痛々しく歪に盛り上がっていた。

「ほんとに、いいの？」

「もう待ちきれないんでしょう？ 早く、して？」

私はごくり、と唾を飲んだ。あらわになったアヤの腕は、私にとろけきった性器を見せつけられているのと同じ気持ちを引き起こす。

今すぐにむしゃぶりついてその樹液を味わいたい。

「じゃ、じゃあ……いくよ？」

私は差し出された彼女の左腕を取り、無数に走る傷へ加えるに最も調和が取れそうな線分を見定める。そのまま滑らかにつつ、と冷たい刃物を滑らそうとするけれど、どうしても手が震えて一步を踏み出すことができなかった。そんな私を見て、アヤが私の手を取って落ち着かせようとしてくれる。

「大丈夫、シオちゃん？ やっぱり、私がしたほうがいいのかしら」

「……ううん。ちゃんとできるよ、アヤ。ありがとう」
私は軽く息を吸って、吐いて。もう一度軽く吸って。それから、アヤの美しい前腕に煌めくナイフの切っ先を当てる。当てて、そうして、アヤが自分でしているように、一気にまっすぐな軌跡を描いた。

「っ！」

と、アヤが小さな悲鳴を上げて、腕は動かさないようにして身をすくめた。私はそれを聞いて慌てて刃を肌から離す。柔らかな肌にこのナイフは鋭すぎたらしく、思い描いていた以上に長くて深い傷を刻んでしまっていたようだ。

「あつ、ごめん！ 痛かった、よね？」

当然、痛いのは痛いだろうけど、アヤが自分でそれをする時はこんな声を上げることはなかったから、やはりやり過ぎたのだと思った。

「う、ううん……違うのよ、シオちゃん。ただ、びっくりして。自分以外の人に切ってもらうのが初めてだったから」

そう言いながらも、アヤの目からは大粒の涙がぼろぼろとこぼれ落ちている。涙も拭かずに、右手で左肩を色が変わるほどに握りしめるようにして、そのせいか右腕は弱々しくぶるぶると震えていた。

「ほんとに、大丈夫……？」

「ふ……ふっ、ごめんなさい。嘘ついちゃったわ。痛い、いたいよ……シオちゃん……」

ぐぐぐ、と右手に入る力が強まったように見えた。アヤがこんなにも痛がっている。アヤがこんなにも苦しんでいる。こんなにも――

「あ……アヤ、大丈夫……？ ねえ？ 痛い……？ ど、どうしようか……」

——こんなにも、アヤが感情をさらけ出したことがあっただろうか。

恋人が私と与えた傷のせいで痛がっている。その激しい感情の発露を見せつけられて、私はどうして興奮していられるのだろうか。

「すぐく、痛い……痛いわ、嬉しい……シオちゃんが……痛く、してくれた……」

だがそれは、彼女も同じだった。私が与えた鋭い痛みと鈍い痛みは、彼女を恍惚とした快感ですっかり包み込んでいた。本来危機感を刺激するはずの痛覚は、もう単なる精神的な快感を盛り上げるスパイスでしかない。

私は思わず彼女の頬を舐めた。アヤの体液は、どんなものであっても魅力的に見える。彼女の涙は思った以上に塩味が少なかった。

「涙もいけど、せっかくしたんだからこっちも舐めて？
シオちゃん」

そう言って、アヤが左肩から手を離す。さっきまで震えていた彼女の身体がいやに落ち着いて、全身から力が抜けていくように見えた。

今しがた刻まれた生々しい傷口から、浮かび上がるようにまっすぐと血が滲んで、ふつふつと真っ赤な真珠が美しいネックレスを形作っていく。その綺麗な首飾りはすぐにぷつりと切れて、床に机にぼつぼつと垂れていった。描きかけの青い水彩画にもアンバランスなアクセントが添えられていくけれど、アヤはその未完の自信作を一瞥すらしない。

「ね。ほら、舐めて？」

私は流れゆく血の一つに口を近づけて、彼女の腕に優しくキスをする。そうして、ぬるりと唇に感じる違和感を舐めとると、私の口にこびり付くような鉄の味が広がる。口の中を駆け巡るその味に、頭がくらくらした。すぐ興奮した。

「シオちゃん、私の血は美味しい？」

「うん、アヤ。すごくいいよ。もっと、するね？」

口に残る血の味が無くならないように、私は何度だってキスをした。血が残っている部分を執拗に舌で突付くと、アヤは傷口の痛さに堪えきれない悲鳴を上げる。彼女の体液をずっと口に含んでいると、それさえも、次の愛撫をねだる甘えた声に聞こえてしまう。

この傷があれば、私とアヤは繋がっていられる。自分で付けた傷にさらに痛みを与えて、私のものだとマーキングしているみたいだ。

「とっても綺麗。私そのまま、シオちゃんの口紅になっ
たみたい」

「アヤに綺麗って言われちゃった、えへへ」

「ええ、あなたと私が一つになったみたいで、すごく綺麗よ」

アヤが熱っぽい視線を向ける度に、私はそれに応えて腕に舌を這わす。

結局、いつの間にか私もアヤも、これなしでは生きられなくなってしまう。私はアヤの血を啜ることを快感だと思っているし、アヤはこれを最高の愛情表現だ

と言った。だから愛に純粹なアヤは、これからも私の手でどんどん傷つけられたいと思うだろうし、私もそうすることだろう。

もしかしたら純粹なアヤなんて最初からいなかったのかもしれないけど、今となってはもう分からない。少なくとも、美しい絵を描き出すあのきらきらとした純粹さは、もう私の中には見つからなかった。

「シオちゃん。だからね、私になんか、なっちゃダメ。私にはあなたのお人形なんだから」

綺麗な水彩画に血が滲む様子に重なって、アヤの透き通るようなブラウンの瞳が徐々に濁っていくように見えた。アヤにはずっと血が流れているけれど、私が血を舐めていく度に生命——魂の総量が減っているんじゃないかと、そういう気持ちになることがある。可愛らしいアヤも、脆いところがあるアヤもみんな消えて、でもそれが、本当に私の求める完璧な人形なのかは分からない。

彼女が人形としての彼女に近づいていくことを想像して、私はまた彼女の腕に舌を這わせた。ぽっくりと開いた薄い赤の傷口をなぞる私の愛撫が強くなる度にアヤは

ぴくり、ぴくりと身体を震わすけれど、それも徐々に弱くなっていき、とうとう時折小さく漏れる嬌声が部屋に響くだけになった。

そこに私の荒い息の音が混じっているのに気付いた辺りで、私は腕から口を離し、うっとりとしたアヤの瞳を見つめた。

「好きよ、シオちゃん」

「私も好きだよ、アヤ。私のこと、ずっと見ててね」

そう言うてから、私はアヤに唇を重ねる。

彼女の唇から感じる体温が、ずっと座っている冷たい人形の唇のそれに重なって、また戻れない現実を意識してほろほろと涙が出た。その一粒がアヤに当たって、それに気付いた彼女は下から私を覗きこむ。それからアヤは軽く微笑んで、私をいたわるようにゆっくりと私の頭を撫で始めた。

「綺麗だよ、文香」

何もかもを差し出して、私はあなたに隷属するわ。だから、あなたは私に縛られるの。どこにいても、ずっと、何もかも。

私はそのまま唇を離さない。目を瞑ってアヤに涙を渡しながら、とろとろした体液を交換しあう。今ここでしっかりと彼女の眼を見つめたら、私が彼女にしてきたこと、彼女が私にくれたもの、その全部が私を押し潰してしまいたいそうだったから。

*

私の涙を全部吸い取って、彼女に魂が宿ればいいのに。そうして目覚めてから不思議そうに私を見つめる彼女に、私の唇の熱を流しこむのだ。

この熱が彼女の身体に広がって、私の愛を知ってほしい。私も好きよと囁いてほしい。もっと私を熱い視線で見つめて欲しい。

ただ、それだけでいい。何も、見えなくていい。

おしまい

書名 ストロベリィドール
発行日 2016/08/14(C90)
発行者 片桐 天音
発行 変態美少女ふいろそふい。
印刷者 (電子書籍版のため省略)
連絡先 circlemaster@hentaigirls.net

表紙イラストを含む全ての作品は CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。CC BY 4.0 の詳細は以下の URL で確認できます。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

変態美少女ふいろそふい。